骨そのものは出土しておらず，結論付けは類例の増加を待ちたい。

埋土の花粉分析では，木本と草本の割合がほぼ同じで，木本はハンノキ属・スギ属，草本はイネ科の割合が高い。植物珪酸体分析では特に黒色粘土シルト層から栽培種のイネ属が多く検出され，クマザサ属の産出も目立つ[86]。

5501号土坑（ＳＫ5501，第145図）

Ｃ地区北側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸3.44m，深さ16cmである。浅い落ち込み状の土坑で，埋土はオリーブ黒色砂質シルト・黒色砂質シルト・黄褐色砂等がマーブル状に混じる単層である。出土遺物は土師器椀１点（*494*）・小片多数，中世土師器皿１点である。

*494*は土師器椀である。口径12.0cm，器高3.9cm，底径5.2cmである。体部は内湾して立ち上がり，口縁部はやや外反する。摩滅のため調整は不明瞭であるが，ロクロ成形で底部は回転糸切りである。

5515号土坑（ＳＫ5515，第121図）

Ｃ地区北側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸1.88m，短軸1.22m，深さ28cmである。埋土は暗灰黄色粗砂・黒色砂質シルトが混じる黒褐色砂質シルトである。出土遺物は土師器小片２点，須恵器杯蓋１点，瀬戸美濃大目茶椀１点である。遺物から16世紀の遺構と推定する。

5522号土坑（ＳＫ5522，第145図）

Ｃ地区北側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径68cm，短径56cm，深さ20cmである。埋土はオリーブ褐色砂を基調とする単層である。出土遺物は土師器小片４点，中世土師器皿１点（*495*），珠洲壺胴部片２点，伊万里碗１点，陶器１点である。

*495*は中世土師器皿である。口径は約10cmである。体部は大きく開き，口縁部は器厚を増してやや外反気味に端部を挽き出す。内面はヨコナデ，外面は口縁部に幅の狭い一段ナデを施し，底部は無調整である。

5538号土坑（ＳＫ5538，第59・121・145図，図版61）

Ｃ地区北側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸5.4m，深さ30cmである。埋土は黒褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルトを基調とする土が薄い層をなして水平堆積する。遺構内の北東部に幅28cmの溝状の埋土の違いが見られ，別遺構の可能性もある。切り合いではＳＤ2467・ＳＤ5321に切られ，古代のＳＫ5101を切る。出土遺物は土師器小片多数，須恵器小片２点，中世土師器皿６点（*496*），珠洲甕３点である。遺物から15世紀後半～16世紀の遺構と推定される。

*496*は中世土師器皿である。口径13.9cm，器厚2.5cmで，約半周分残存する。平底で，体部は大きく開き，口縁部はやや外反して端部は上方に小さくつまむ。内面全面にススが付着し，灯明皿として使用されたものと考えられる。内面の調整はススのため不明瞭であるが口縁部はヨコナデで，外面は口縁部は幅の狭いヨコナデ，体部から底部にかけては軽くナデる。

5635号土坑（ＳＫ5635，第122・205図，図版113）

Ｃ地区北側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸8.2m，短軸3.4cm，深さ30cmである。埋土はほぼ水平堆積で，上層は黒褐色砂質シルトを基調とし，下層は黒褐色粘土と黒褐色砂質シルトが互層となる。出土遺物は珠洲壺・甕・擂鉢胴部片各１点，越中瀬戸小片１点，伊万里碗１点，碗１点（*1378*）である。切り合いではＳＤ2457に切られる。遺物から17世紀以降の遺構と推定される。

*1378*は四葉碗で，内面に墨痕が残る。凝灰質泥岩で，高嶋碗の可能性が高い。碗面は縁がやや深く彫り込まれており，中世後半のものと考えられる。

7242号土坑（ＳＫ7242，第122・182図，図版97）

Ｅ地区東側に位置する。平面形は円形で，直径56cm，深さ44cmである。埋土は上層が黄灰色粘土がブロック状に混じる褐灰色粘土，下層は黒褐色粘土である。出土遺物は円形板１点（*1205*）である。

*1205*は円形板で，方形の抉り込みがある。材はスギで，放射性炭素年代は11世紀中頃～12世紀中頃である[註69]。

7244号土坑（ＳＫ7244，第122・145・181図，図版47・97）

Ｅ地区東側に位置する。平面形は円形を呈し，直径72cm，深さ54cmである。埋土は水平堆積で，上層は褐灰色粘土，中層は黒褐色粘土を基調とし，黄灰色粘土が混じる。下層は黒褐色粘土である。出土遺物は中世土師器皿３点（*497*・*498*），珠洲甕胴部片１点・擂鉢片１点，円形板１点（*1196*），曲物側板１点，板材，種実（トチ）１点である。中世土師器，円形板は下層から，板材は中層の下部から下層にかけて出土した。遺物から遺構の年代は13世紀と推定する。

497・*498*は中世土師器皿である。*497*は口径8.8cm，器厚1.8cmの小皿で，約半周分が残存する。底部から体部にかけて内湾して立ち上がり，口縁部は端部を残して内面を押さえるようにナデを施すため，端部が内側に肥厚する。口縁部は一段ナデ，底外面は無調整である。*498*は口径約12cmで，口縁部に一段ナデを施し，端部に面を取る。底外面は無調整である。13世紀前半のものである。

*1196*は円形板である。他の曲物に比べやや厚みがある。材はスギである。

7256号土坑（ＳＫ7256，第122・201図）

Ｅ地区東側に位置する。平面形は円形を呈し，直径80cm，深さ76cmである。埋土は上層に黄灰色粘土が厚く堆積し，中層は褐灰色粘土と炭化物の混じる黒色粘土がレンズ状に堆積する。下層は灰色粘土と黒色粘土が水平堆積する。出土遺物は曲物側板１点，板材４点（*1339*）で，下層から出土した。曲物の放射性炭素年代は11世紀中頃～13世紀初頭であり[註69]，遺構の年代も同時期と推定する。

*1339*は厚さ３cmのスギ材で，平面形は山形とする。用途は不明である。

Ⅰ　畑

３号畑（ＳＮ３，第123図）

Ｂ２地区中央部から南側に位置する。幅22～60cm，深さ４～22cmの畝間溝（さく）が並行している。畝間溝は東西方向に走り，真北に対してほぼ直角となる。埋土は灰黄褐色砂質ロームが混じる黒褐色粘土質ロームである。切り合いではＳＰ1466（ＳＢ８）・ＳＤ929に切られる。

出土遺物は中世土師器皿６点である。

４号畑（ＳＮ４，第123図）

Ｂ３地区北側中央部に位置する。幅16～52cmの溝状，または途切れて楕円形または円形の土坑状となった畝間溝（さく）が並行している。畝間溝の方向はＮ－64°－Ｅである。埋土はにぶい黄褐色砂が混じる黄灰色砂質シルトでよく締まっている。切り合いでは，ＳＤ1292・ＳＤ2055を切る。

遺物は須恵器杯１点，土師器小片３点，珠洲甕胴部片５点，古瀬戸小片１点，中国製染付皿１点，伊万里皿１点・小片１点，陶器小片１点である。切り合いと遺物から，遺構の時期は近世と推定する。

註69　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「小塩北條谷西遺跡出土木製品の放射性炭素年代測定」

3　包含層出土遺物

縄文土器（第146図*499*～*501*，図版48）

499～*501*は深鉢である。*499*は口唇部を指で押さえて小波状口縁とし，器面全体に羽状縄文を施文する。外面全面と内面下部にススが厚く付着する。広義の極楽寺式に当てられ，縄文時代前期前葉～中葉のものである。*500*・*501*は小型の深鉢で，*500*は口径約10cm，*501*は底径約７cmである。*500*は無文でナデ調整を施し，内面にススが付着する。*501*は縄文を施文する。

土師器（第146・152図*502*～*507*・*653*～*660*，図版54・57）

*502*は鍋である。口縁部は全周の約1/4が残存するが歪んでおり，口径は約40cmである。体部は半球状よりやや扁平で，口縁部はくの字状に折れ，端部は上方へつまみ上げる。口縁部はヨコナデで，体部外面は下半は平行叩き，上半はカキメを施す。内面は同心円当て具痕をハケメで消している。胎土に粗い砂粒を多く含み，焼成はあまく軟質である。８世紀のものである。

503～*505*は長胴甕である。口径は*503*が17.7cm，*504*は約21cm，*505*は約22cmである。頸部はくの字状に折れる。口縁部形態は*503*は外方に面を取り，*504*は受け口状を呈し，*505*は内側に巻き込む。*503*は口縁部はロクロナデ，体部外面は縦方向のハケメを施す。*504*はロクロナデで，体部外面にカキメを施す。*503*・*504*は胎土に粗い砂粒を多く含む。焼成はすべて軟質である。*503*・*504*は８世紀，*505*は９世紀のものである。

*506*は鉄鉢である。口径は15.6cmである。半球状の体部上半から口縁部にかけて内湾し，端部は尖り気味になる。内外面にミガキを施す。焼成はやや軟質で，色調は均一でにぶい橙色を呈する。

*507*は有台椀である。貼り付け高台で，摩滅のため調整は不明である。

653～*657*は皿である。口径6.8～10.0cm，器高1.6～2.3cm，底径3.0～4.6cmである。口縁部及び内底面はロクロナデ，底外面は回転糸切りである。*653*・*654*は口縁部が直線的に開く器形で，口縁部中程に明瞭な稜を残してロクロナデし，器形・法量も似ているが，色調は*653*がにぶい橙色，*654*は浅黄橙色で，*653*のみ端部に面を取る。*655*はほぼ完形であるが口縁部のススの付着はわずかで，灯明皿として一度きり使用されたものとみられる。*656*・*657*は口径がやや大きく内湾して立ち上がる器形で，*656*は回転糸切りの切り離し位置がやや低くなっている。

658～*660*は椀である。体部及び内底面はロクロナデ，底外面は回転糸切りである。*658*・*659*は器壁が薄く，内湾気味に立ち上がる。橙色を呈し，焼成はあまく軟質である。*660*はほぼ半周分が残存し，口径12.3cm，器高3.9cm，底径5.7cmである。体部は内湾して立ち上がり，回転糸切りの切り離し位置がやや低くなっている。色調は淡黄色を呈する。

黒色土器（第146図*508*～*511*，図版53）

508～*511*は有台椀である。*508*は口径14.8cm，器厚5.6cm，底径6.0cmである。外面はナデ調整，内面はミガキで内面のみ黒色処理する。底外面は回転糸切りで，低めの高台が付く。*509*は内面ミガキ調整で黒色処理されるが，摩滅のため不明瞭である。底外面は回転糸切りで，逆台形の高台が付く。*510*は焼成があまく軟質である。*511*は内外面ミガキで黒色処理する。底外面は回転糸切りで，低い高台が付く。

須恵器（第147～151図*512*～*652*，図版48～52・66）

512～*546*は杯蓋である。口径は9.8～19.5cmに分布する。器厚の低い扁平なものがほとんどである。口縁部の形態は断面三角形を呈するものが主体で，小さく折り曲げたものも一定量あるが，断面方形

に折り曲げるものはわずかである。つまみは，*531*がボタン状，*543・544*が扁平な擬宝珠状を呈する。調整は，*519～521・525・531・544*は全面ロクロナデ，*514・543*はロクロナデ後，頂部に回転ヘラケズリ調整で，*520・521・531・543・544*は内面中央に仕上げナデを施す。*521*は外面中央にヘラ記号「－」か。途中で欠損している。*514*は内面に薄く墨痕があり，転用硯と考えられる。

*547～581*は有台杯である。完形のものはなく，小片が多い。法量がわかるものは*547*の口径13.0cm，器高4.0cm，底径9.5cm，*576*の口径10.8cm，器高4.0cm，底径6.6cmである。*553*は体部下半で外方に強く屈曲する器形で，杯以外の器種の可能性もある。調整は，体部はロクロナデ，底外面は回転ヘラ切り後無調整のものが多いが，*549*は回転ヘラケズリ調整，*550・568・579*はナデ調整を加える。*576*は底外面中央にヘラ記号「－」か。途中で欠損している。

*582～601*は無台杯および高台の有無が不明の杯で，*583・586・588・590・592～594・598*が無台杯である。口径11.0～17.0cm，器高2.3～4.1cm以上，底径5.0～10.4cmに分布する。ほぼ完形のものは*598*のみで，他は小片が多い。体部の立ち上がりは直立に近いものから直線的に大きく開くものまであり，8～9世紀の年代幅がある。*590*は口径に対する器高の比率が最も低く浅形で，*597・601*は深身である。調整は，体部はロクロナデ，底外面は回転ヘラ切りで*592・593*は軽くナデ調整を加える。*594*は底外面にT字状の墨痕があるが，墨書であろうか。*583*は焼成があまく軟質である。

*602～636*は壺または瓶類である。*602～606*は短頸の壺である。*604*は端面を水平とし，内端部が突出する。*606・608*は外端部を挽き出す口縁形態で，*606*は上面に強いナデを施し，凹線状に窪む。*607*は端部が外屈し，やや垂下する。*609～611*は広口の瓶類である。口縁部は外屈し，端部は上方につまみ上げて外方に面を取り，*611*は外屈させた口縁部の内面に稜ができる。*612～615*は長頸の壺または瓶の頸部で，*614*は2条の沈線をもつ。*616*は小型の長頸瓶で，肩が張り，沈線をもつ。*617*は長頸瓶の頸部である。*618*は水瓶で，口縁部は水平に拡張して端部は外方に面を取り，口径は4.1cmである。*619*は甕である。肩部に沈線をもち，穿孔される。*620*は小型の壺である。短頸で，体部は扁平である。口径5.5cm，器高3.8cm，底径6.5cmで，口縁部及び体部内外面と内底面はロクロナデ，底外面は静止糸切りか。内底面と，口縁部から体部外面にかけて自然釉がかかることから，開口した状態で正位で窯詰めされたものと考えられる。*621～623*は断面方形の突帯が付く胴部で，9世紀前半の双耳瓶と考えられる。*624～627*は双耳瓶の耳部分である。側縁はヘラで削り取って成形した後ナデ調整する。*626*は胎土に粗い砂粒・礫粒を含む。*628～635*は底部で，底径は4.9cm～13.4cmである。底外面の調整及び切り離し技法は，*628*は回転ヘラ切り後ナデ，*629・630・634*はナデ調整で切り離し技法は不明，*631*は回転糸切りである。*636*は径16.5cmの脚部で，内端部を突出させる。

*637～641・643～652*は甕である。*637～641*は口径約20～29cmである。*637～639*は頸部が外反して大きく開き，口縁部は外方に面を取る。*637・639*は端部を下方に垂下させ，*638*は上方へ尖らせて端面を拡張する。*640*は口頸部が外傾し，端面は水平とする。*641*は頸部は外反し，口縁部は外方に折り曲げて端部をやや垂下させ，上端は摘み上げる。頸部外面は平行叩きをロクロナデで消している。*643*は小型のもので口径約16cmであり，口縁部は外面に折り返し縁帯とする。*644～647*は同様の縁帯をもち，*644・645*は頸部に波状文を施す。*648*は外方に面を取り端部は上方に尖らせる。*649*は口縁部が外屈し端部が尖る。*650*は口径約19cmで，肩部は丸く膨み，直立する頸部に外反する口縁部が付く。口縁端部は上方へ摘んで挽き上げ，端面を拡張させる。調整は口縁部がロクロナデ，体部外面は平行叩きとカキメ，体部内面は同心円当て具で上半にカキメを施す。*652*は頸部から肩部にかけての破片で，同様の調整を施す。*651*は大型の甕で口径約40cmである。口縁部は外方に折り返して縁帯とし，内端

部は挽き出して鋭く尖らせる。

*642*は鉢である。口径約31㎝で，体部はやや外傾し，口縁部は外屈して端部を丸く収める。

中世土師器（第152図*661*～*688*，図版61・62）

661～*688*は皿で，非ロクロ成形である。*661*～*677*は小皿で，口径7.0～9.8㎝，器高1.4～2.4㎝である。*662*・*663*・*666*・*667*・*670*・*672*はほぼ完形である。*661*～*665*は平底気味の底部から短い口縁部が外傾して立ち上がる。*661*は摩滅のため調整不明だが，*662*～*665*は口縁部に一段ナデを施し，底外面は無調整である。*666*～*669*は器壁が厚く丸底で，底部から口縁部にかけて内湾する。*667*は一段ナデと端部の面取りを施すが，他はナデと底部の無調整部分の境が不明瞭である。*670*～*672*は器壁が厚く平底で，口縁部は直立気味に屈曲する。口縁部は一段ナデを施し，底外面は無調整である。*673*～*675*は平底気味の底部から口縁部がやや外反して立ち上がる。口縁部は一段ナデ，底外面は無調整である。*676*・*677*は丸底で口縁部は内湾気味に引き出し，*677*は端部がやや外反する。内面はナデ，外面は口縁部に幅の狭いヨコナデを施し，底外面は無調整である。

678～*688*は大皿で，口径10.2～14.4㎝，器高1.5～2.8㎝である。*688*は小片のため口径は不明確である。*678*は器壁が薄く，平底気味の底部から口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる。内底面中央に直径２㎜の穿孔がある。口縁部は一段ナデで端部に弱く面取りし，底外面は無調整である。*679*は丸底で，口縁部のヨコナデ幅が広い。内面は見込みに不定方向のナデを施した後ヨコナデを施す。底外面は無調整である。*680*は平底気味の底部から口縁部がやや外反して立ち上がる。*681*は底部は平底気味で，口縁部は下半が強く外反し上半はやや内湾して大きく開く特殊な形態である。外面調整は不明だが内面はヨコナデを施す。*682*・*683*は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる。*684*は平底の底部から口縁部が外傾して立ち上がり，口縁端部に面を取る。*685*は口縁部は直立気味に屈曲して立ち上がる。*686*～*688*は底部は平底気味で，口縁部は外傾してやや長めに引き出す。口縁端部は*686*・*687*は摘むように尖らせ，*688*は内湾する。内面はヨコナデを施し滑らかだが，外面口縁部の下半は指頭で粗く成形する。

大皿・小皿とも灯明皿として使用されているものがあるが，特に小皿にタール状の灯芯油痕が付着するものが多い。*666*・*670*・*675*・*676*・*679*は口縁部の一部に，*664*・*668*・*669*は口縁部の広い範囲に，*677*は内面全面に，*672*は外底面を除く広い範囲に，*674*・*688*は内外面のほぼ全面に付着する。特に*672*は分厚く付着している。*686*は口縁部の広い範囲に，*681*は内面の一部に薄くススが付着し，これらも灯明皿として使用されたと考えられる。

珠洲（第153～160図*689*～*723*・*725*～*837*，図版64・66～69）

*689*は椀か。口径は約17㎝である。口縁部残存率16％の破片でやや歪みもあり全形は不明だが，器高が低く体部が大きく開く形態で，経筒外容器の蓋の可能性もある。内外面ロクロナデである。

690～*723*・*725*～*784*は擂鉢である。*690*～*693*は口径約18～20㎝の小鉢である。水平口縁で体部及び口縁部が内湾する。Ⅰ期に比定され，12世紀後半のものである。*694*は口径約20㎝の小鉢で，水平口縁の端面に波状文を施す。Ⅰ～Ⅱ期に比定され，12世紀末～13世紀前半のものである。*695*は口径約22㎝の小鉢で，先細りする水平口縁で，体部は内湾する。Ⅰ期のもの。*696*～*700*は口径約18～26㎝の小・中鉢で，*696*・*699*・*700*は外傾口縁，*697*・*698*は水平口縁で，体部はやや内湾する。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。*697*は断面に漆継ぎの痕跡がある。*701*～*705*は口径約27～33㎝で，内端部が内側に突出する水平口縁であり，Ⅰ期に比定される。*706*は口径約30㎝の大鉢で，水平口縁であり，口縁部は内湾する。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。*707*～*713*は口径約32～36㎝の大鉢でⅡ期に比定される。*707*・

*708*は水平口縁で，体部は内湾し一部に斜位の卸目が確認できる。*708*は口縁部端面に波状文を施す。*709*は内湾する口縁内端を爪状に収め，体部は内湾する。1.2cm幅に9目の細密な原体を用い，口縁端面と体部内外面に波状文を施す。外面の波状文は1条だが，内面は波長の異なる数条を縦横に交差させ卸目とする。*710*・*712*・*713*は口縁内端を爪状に収め，体部はやや内湾する。*710*・*711*・*713*は曲線文，*712*は直線文と曲線文の卸目が施人される。櫛歯原体は*710*は2.1cm幅に11目，*713*は2.0cm幅に11目である。*714*・*715*は口径約26～29cmの中鉢で口縁部下の器肉がやや薄く，水平口縁に近い外傾口縁である。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。*716*～*721*は口径約28～33cmの大鉢で，口縁内端部を上方に挽き上げる外傾口縁で，体部はやや内湾する。卸目は直線文で放射状に施入される。櫛歯原体は*717*が1.9cm幅に18目，*718*が2.4cm幅に11目，*721*が2.1cm幅に11目である。*722*・*723*は口径約41～46cmの特大鉢で，口縁内端部を上方に挽き上げる外傾口縁で，体部はやや内湾する。Ⅱ期に比定される。*723*は直線文の卸目が確認される。*725*～*735*は外傾口縁で端面は平直に仕上げ，体部は直線的に開く形態で，上半部の器厚はほぼ一定である。Ⅲ期に比定され，13世紀中頃のものである。卸目は直線文で放射状に施入される。櫛歯原体は*729*は2.0cm幅に9目，*732*は2.7cm幅に12目である。*725*は断面に接継ぎの痕跡がある。*736*・*737*は口径約28～30cmで，端面を拡張させた外傾口縁で，Ⅳ$_1$期に比定され，13世紀末～14世紀初頭のものである。*736*は二次被熱を受けて内面が煤けている。*738*～*741*は口径約26～32cmの水平口縁で，Ⅳ$_1$～Ⅳ$_2$期に比定され，13世紀末～14世紀中頃のものである。*740*の櫛歯原体は2.5cm幅に8目である。*742*は水平口縁で端面はやや拡張し，器壁は厚い。Ⅳ期のもの。*743*は端面の拡張が著しい水平口縁で，体部は直線的に開き，卸目は2.5cm幅に9目の原体を用いて口縁部直下から施入される。Ⅳ$_3$期に比定され，14世紀後半のものである。*744*は口径約28cmで，口縁部は内湾し，端面は幅が狭く甲盛り気味でやや内傾する。口縁部内面に弱い段があり，そこから卸目が放射状に施人される。原体は一単位2.3cm幅に9目である。胎土は白色粒を多く含みざらつきがある。珠洲同様の還元硬質に焼成されているが，形態や胎土が特殊であることから能登以外の産地で製作された珠洲系陶器の可能性がある。*745*～*752*は口径約26～40cmで，端面を拡張させた内傾口縁で，端面には波状文を施す。体部は直線的に大きく開く。卸目は目の太い原体で密に施入され，*750*は一単位2.7cm幅に9目である。Ⅴ期に比定され，14世紀末～15世紀前半のものである。*753*は水平口縁の端面に波状文を施すもので，Ⅳ$_3$～Ⅴ期に比定される。*754*～*763*は口径約24～40cmで，口縁内端に広い面を取り，そのうち*756*～*763*は波状文を施すもので，面取りの形骸化したものもある。卸目は目の太い原体で密に施入される。胎土は粗く，調整も粗雑である。Ⅵ期に比定され，15世紀中頃のものである。*764*は口径約32cmで，内端を肥厚，突出させた内傾口縁である。胎土は粗い。Ⅶ期に比定され，15世紀末のものである。*765*～*783*は底部である。底外面は静止糸切りで板状圧痕が残るものもあり，*779*はハケ状工具でナデ調整する。*768*は，底部と体部の境界付近を粗く指押さえするが，粘土接合痕が残る。卸目は曲線文と直線文を組み合わせるもの，入り組み技法で放射状に施入するものがある。*784*は外面に「□忠ヵ」の墨書がある。

785～*809*は甕である。口縁部はヨコナデ，体部外面は平行叩きを施し，内面は円礫による当て具で，*802*・*806*は内面にヨコナデで軽くかきならし調整を加える。*785*・*786*・*808*は口縁上部に端部折り曲げの際の棒状具による押圧溝が巡る。*785*～*791*・*807*～*809*はコの字状に外反する長頸に鍔頸口縁が付くもので，*809*は肩が球状に張り出す。Ⅰ期のものである。*792*はやや短い頸部から水平に挽き出した鍔頭口縁で，Ⅱ期に比定される。*793*～*795*はくの字状口縁で，口縁部は長めに挽き出され，*793*・*794*は円頭，*795*は方頭を呈し，Ⅲ期に比定される。*796*～*803*は平直な方頭のくの字口縁，*804*・*805*は円

頸のくの字口縁，*806*は短く下向きに屈曲する方頸で，Ⅳ期に比定される。

*810～814・816～821・824～837*は壺である。*810・811*は小壺である。*810*は口径約10cmで口縁部は短く直立する。*811*は肩部に稜をもち櫛目波状文が施入される。Ⅰ期のもの。*812・813*はロクロ成形で，外面に櫛目袈裟襷文を施す。*814*は叩打成形で，交差する4筋の基線の中に×を配した四方襷文の装飾原体を用い，下半はその上から鋭利な平行叩きを施す。内面は円礫の当て具痕を残す。Ⅰ～Ⅱ期のもの。*816～821*は体部倒卵形の壺で，*816～819*は肩部にブリッジ状の横耳を貼り付ける四耳壺である。ロクロ成形で，*821*は静止糸切りである。肩部はなだらかで波状文を施すものが多く，Ⅰ期に比定される。*824*は口径約11cmの小壺で，肩が張り，方頸のくの字口縁を呈する。*825*は端部を肥厚させ端面に条溝が巡る口縁形態で，Ⅳ2期に比定される。*827～829・834*は方頸のくの字口縁で*829・834*は内面に条溝が巡る。*830*は崩れた方冠状口縁で胎土は粗く，Ⅴ期のもの。*832*はなだらかな嘴頸口縁でⅢ～Ⅳ期のもの。*833*は端面をシャープに仕上げたくの字口縁でⅡ期のもの。*835*は頸部に鋭い稜をなして押圧溝が巡る方冠頸でⅤ期のもの。*836*は崩れた方頸で上面に押圧溝が巡る。*826・831・837*は叩打成形壺である。*826・831*は口頸部が直立またはやや外傾し，外端部を嘴状に挽き出す。*837*は口径約39cmのくの字状口縁で長めの方頸を呈し，端面には波状文を施すⅤ期のもの。

*815・822・823*は瓶類である。*815*は水瓶である。頸基部に蓮弁座を貼り付け，肩部に櫛目波状文を施す。Ⅰ期のもの。*822*は瓶子である。口径8.6cmで，頸部は弧状に外反し，口縁部は端面を拡張し外端部を鋭く仕上げる。*823*も器厚が薄く，長頸で端部は丸く収める口縁形態で，瓶子か。

中国製白磁（第161図*838～855・861・862*，図版71）

*838～842・845～847*は肉厚の玉縁口縁をもつ碗で，大宰府分類の碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。*838～842*は口縁部片で，口縁部周辺及び内面はロクロナデ，外面は口縁部直下から回転ヘラ削りを施す。*845～847*は底部片で，高台は幅広で浅く削り出し，*847*は高台周辺に粗い削り痕を残す。見込みに沈線をもつⅣ1a類に相当する。胎土は細かい空洞があってやや粗雑であり，*838・840・842・845～847*は灰色味の強い灰白色，*839・841*は黄味を帯びた灰白色を呈する。体部外面下半から高台周辺は無釉である。

*848*は内面に櫛目文をもつ碗で，大宰府分類の碗Ⅴ類またはⅥ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。削り出し高台であり，高台周辺は無釉となる。胎土は細かい空洞があり粗雑で，灰白色を呈する。

*843*は端反の碗で，大宰府分類の碗Ⅴ2a類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものである。胎土は灰色味の強い灰白色を呈し，やや粗い。

*844*は口縁部が屈折して内面に鋭い稜がつく碗で，大宰府分類の碗Ⅴ4a類またはⅦ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。胎土は灰色味の強い灰白色を呈し，やや粗い。

*849～853*は口縁部が口禿となる皿で，大宰府分類の皿Ⅸ類に相当し，13世紀中頃～14世紀初頭のものである。*849*は口径10.4cm，器高3.0cm，底径6.0cmで，平底であり，Ⅸ1b類に相当する。*850～852*は口径11cm前後で，Ⅸc類に相当する。*853*は，口縁部が端反になるⅨd類に相当する。胎土は灰白色を呈し微細な黒色粒を含む。

*854*は中国製か。小杯で，口縁端部は小さく外反し，薄手である。胎土には微細な黒色粒を含む。

*855*は多角杯で，高台は4箇所を弧状に抉り込み，四足となる。見込みには別個体の四足の重ね焼き痕が残る。高台周辺は釉を掻き取る。森田D群に属し，14世紀後半～15世紀のものである。

*861・862*は壺で，口縁部は垂下気味に外方へ折り曲げる。大宰府分類の壺Ⅲ類に相当する。

中国製青白磁（第161図*856～860*，図版70・71）

*856～858*は合子蓋で，口径は5.4cm～8.0cmである。11世紀後半～12世紀後半のものである。青みを帯びた釉を全面に施した後，内面の口縁部の釉を掻き取り，外面全面と内面の天井部に釉が残る。*856*は口縁端部と天井部の中間に稜をもち，稜から下は釉を掻き取る。天井部には型押しの文様をもつが，鳥の一部か。*857・858*は口縁部に細身の蓮弁文を施し，*857*は天井部にも型押しの鏡蓮弁文がみられるが，*858*の天井部の意匠は不明である。*859*は合子身で，口径は4.5cmである。細身の蓮弁文を施す。外面に緑色味を帯びた釉を施し，内面も一部を除いて釉が流れている。

*860*は壺蓋である。内外面ロクロナデし，内面中央は回転糸切りでやや高めに切り離す。外面中央は小円状にくぼむが，端部までほぼ平坦で，緑色味を帯びた灰白色の釉を外面にのみ施す。12世紀中頃～後半のものか。

中国製青磁（第162・163図*863～899*，図版72・73）

*863～889*は碗である。*863・876～881*は内面に片彫りの花文をもち，櫛目が入るものもある。口縁部は直口で，腰が張り，高台は断面四角形で抉りが浅く底部は肉厚となる。*863・876・877*は大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ2類に相当し，*878～881*は体部の文様が不明確であるためⅠ2～4類としておく。12世紀中頃～後半のものである。胎土は緻密で灰色味の強い灰白色を呈する。釉は透明なオリーブ灰色またはオリーブ黄色で緑色味を帯びるものが多いが，青味を帯びるもの（*876・881*）もあり，高台の外側まで施され，畳付と高台内側は釉剥ぎされる。*864～866*は，内面に片彫りの飛雲文をもつ大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ4類で，そのうち*866*は口縁部が輪花状でⅠ4b類と確認される。12世紀中頃～後半のものである。胎土は緻密で灰色味の強い灰白色を呈する。釉は透明で，緑色味を帯び，高台の外側まで施釉される。*867～871・883*は鏑蓮弁をもち，大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅱb類に相当する。13世紀前半のものである。*883*は見込みに幾何学文のスタンプ文を有する。胎土は精緻で，灰色味の強い灰白色を呈するもの（*867・868・870・871・883*），黄味を帯びた灰白色のもの（*868*）がある。釉は半透明でオリーブ黄色を呈するもの（*868・869*），半透明でオリーブ灰色を呈するもの（*870・871*），透明度が高くオリーブ灰色を呈するもの（*867・883*）がある。*869*は貫入がある。*872*は片彫りで幅広の蓮弁が施されるが，鏑はない。胎土は淡黄色の粗粒を含む。半濁した灰オリーブ色の釉が薄く施される。14世紀の大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅳ類か。*873～875*は外面にヘラ描きの細蓮弁文をもつ。胎土はやや粗く，*873*は灰色味の強い灰白色，*875*はやや黄味を帯びた灰白色を呈する。釉は*873・874*はオリーブ灰色，*875*はにぶい黄色を呈し，*874*は半濁している。*873*は上田分類のBⅢ類またはBⅣ類，*874・875*はBⅣ類に相当し，15世紀後半～16世紀初頭のものである。*882*は底部破片のため体部の文様は確認できないが，見込みは無文で圏線をもつ。腰の張る器形で，高台は断面四角形で抉りが浅く底部は肉厚となる。大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。胎土は焼成不良のため淡黄色を呈し，気泡がやや多い。釉はオリーブ黄色を呈し，高台外側まで施釉する。高台内側にくずし字の墨書がみられるが字意は不明である。*884*は外面に蓮弁文を有し，高台は外端部を斜めに削り取る。高台内の抉りは深めで粗く，中央に削り残しがある。胎土は黒色細粒と気泡が多くやや粗い。釉は半透明で，明るい緑味の灰色を呈し，高台内と内底面を円形に釉剥ぎする。上田分類のBⅡa類に相当し，14世紀後半～15世紀前半のものである。*885*は見込みに「金玉満堂」のスタンプがある。高台の抉りが浅く底部は肉厚で，大宰府分類の龍泉窯系碗Ⅰ類またはⅡa類に相当し，12世紀後半～13世紀前半のものである。胎土は緻密で，釉は灰オリーブ色を呈し，畳付の半分まで施され高台内側は釉剥ぎする。*886*は口縁部は外反し，端部は肉厚で丸く収める。上田分類のDⅡ類に

相当し，14世紀後半～15世紀前半のものである。胎土は灰色味の強い灰白色を呈し，微細な白色粒・黒色粒を含みやや粗い。釉は半濁し，オリーブ灰色を呈する。断面に漆継ぎの痕跡がある。*887*～*889*は，外面に細かい縦の櫛目文を施す碗で，大宰府分類の同安窯系碗Ⅰ１ｂ類に相当し，12世紀中頃～後半のものである。内面は上位に沈線をめぐらせ，*887*ではヘラ状の施文具による略化した花文と，櫛によるジグザグ状の点描文がみられる。胎土は緻密で，*887*・*888*は灰色味が強く，*889*は黄味を帯びる。釉は透明なガラス質で灰色または灰オリーブ色を呈する。

890～*895*は皿である。*890*は内面にヘラによる片彫り花文を有する。大宰府分類の龍泉窯系皿Ⅰ１ｂ類に相当し，12世紀後半のものである。胎土は灰白色で緻密である。釉は透明なガラス質でオリーブ灰色を呈し，底部外面は釉剥ぎする。*891*～*895*は内面にヘラによる文様とジグザグの鋸点描文を有する。胎土は緻密で灰白色を呈し，灰色味が強いもの（*892*・*893*）もある。釉は透明なガラス質で緑色を帯びるものが多いが，*891*は明オリーブ灰色で青味が強い。底外面は釉剥ぎする。大宰府分類の同安窯系皿Ⅰ２ｂ類に相当し，12世紀後半のものである。

896・*897*は稜花皿である。体部は外反し，口縁部は波状に抉る。内面にはヘラ彫りの文様をもつ。胎土はやや粗く，釉は透明なガラス質で，緑味を帯びたオリーブ灰色を呈する。龍泉窯系の稜花皿で15世紀のものである。

*898*は杯である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はほぼ水平に長く屈折させ，上端は凹面をなし，端部はさらにつまみ上げる。胎土は緻密であり，釉は半濁して明緑灰色を呈する。太宰府分類の龍泉窯系杯Ⅳ類に相当し，13世紀後半～14世紀初頭のものである。

*899*は小盤である。口径は約20cmで，大宰府分類の龍泉窯系小盤Ⅲ類に相当し，13世紀後半～14世紀初頭のものである。口縁部はほぼ水平に長く屈折させ，上端は凹向をなし，端部はさらにつまみ上げる。胎土は微細な黒色粒を多く含む。釉は半濁して明緑灰色を呈し，厚く施釉される。

中国製染付（第163図*900*～*903*，図版71）

*900*は碗である。小野分類のＣ群で，芭蕉文を有し，断面に漆継ぎの痕跡がある。15世紀後半～16世紀前半のものである。

901・*902*は皿である。*901*は小野分類のＢ２群の小型の皿で，蕨磨文を有する。景徳鎮窯製で16世紀後半のものである。*902*は小野分類のＢ２またはＥ群で，16世紀後半のものである。

*903*は小杯で，外面に花弁文を有し，畳付から高台内は露胎である。明末～清期のものである。

古瀬戸（第164図*904*・*905*・*908*～*910*・*918*～*921*，図版74・75）

904・*905*は天目茶椀である。口径は約13cmである。口縁部の形態は，*904*は内湾し垂直に立ち上がり，*905*は端部が先細りして外反する。黒褐色の鉄釉が施され，*905*では高台周辺に錆釉がかかる。*904*は後期様式Ⅳ期古段階，*905*は後期様式Ⅳ期新段階の製品で，15世紀後半のものである。

908～*910*は卸皿である。*910*は，口径17.6cm，器高3.8cm，底径7.6cmである。口縁端部はやや外反し，上方に面を取る。上半部内外面に灰釉を施す。内外面の露胎部にはススが付着し，釉もざらついており，二次的な被熱を受けたものとみられる。後期様式Ⅳ期古段階の製品で，15世紀中頃のものである。

*918*は折縁深皿である。口径は32cm前後に復元される。口縁部は外方に折れ，端部は角ばる。外面の口縁部直下はロクロ目が目立つ。内外面に灰釉を施す。後期様式Ⅳ期古段階の製品である。

*919*は卸目付大皿である。口径は28cm前後に復元される。口縁部は外反し，内端部が突帯状に肥厚する。外面の口縁部直下はロクロ目が目立つ。後期様式Ⅳ期古段階の製品である。

*920*は盤類の底部で，獣足状の脚が付く。破片のため卸目の有無は不明である。外面は回転ケズリで露胎であり，内面は灰釉がかかり施釉時の刷毛目が残る。断面に漆継ぎの痕跡がある。後期様式Ⅲ期～Ⅳ期古段階の製品で15世紀前半～中頃のものである。

*921*は合子である。胴部最大径は6.8cmである。外面には，肩部から垂下する隆帯にヘラで斜線を引いた鎧手と呼ばれる文様と，菊文を施した小円盤を貼り付ける貼花文を有する。内外面に灰釉を施す。中期様式Ⅱ期の製品で14世紀前半のものである。

瀬戸美濃（第164図*906*・*907*・*911*～*917*・*922*，図版74・75）

*906*は天目茶椀である。口径は約12cmである。口唇部はくびれ，端部は短く外反する。鉄釉と，高台周辺には薄い錆釉が施釉される。大窯Ⅰ期の製品で，15世紀末～16世紀初頭のものである。

*907*は平椀の底部か。削り出し輪高台で，内面は鉄釉，外面には濃い錆釉がかかる。大窯Ⅰ期の製品である。

911～*914*は折縁皿である。口径10.4～10.8cm，器高2.1～2.2cm，底径5.0～6.0cmである。口縁部は水平に外屈し，端部は上方に折り返して丸く収める。内面は丸繋状工具により菊花状にソギを入れる。*911*は見込みに印花文を有し全面に施釉するが，*912*・*914*は見込みの凸部の釉を拭い取って重ね焼きしたもので，高台内には輪ドチが溶着する。大窯Ⅳ期前半の製品で16世紀末のものである。

*915*は志野菊皿である。口径12.2cm，器高2.9cm，底径7.0cmである。体部は丸みをもって立ち上がり，内面は花弁状に掻き取られる。外面は厚く釉が掛かり，刻線はみられない。口縁端部は残存部のほぼ全周が摩滅して釉が剥がれ，そこにススが付着することから灯明皿として使用されたとみられる。全面に長石釉がかかり，見込みに円錐ピン痕が残る。大窯Ⅳ期前半の製品で16世紀末のものである。

916・*917*は丸皿である。*916*は口径11.0cm，器高2.6cm，底径7.0cmである。全面に灰釉を施釉し，高台内には輪ドチが溶着する。*917*は見込みに菊の印花を有し，細かな破片が漆継ぎされている。*916*は付高台，*917*は削り出し高台で底部はやや厚くなっている。*916*は大窯Ⅲ期前半の製品で16世紀中頃，*917*は大窯Ⅲ期後半の製品で16世紀後半のものである。

*922*は筒形香炉である。口径は約10cmである。口縁部を内屈させて水平端面とし，外周には沈線を施す。大窯Ⅰ～Ⅲ期の製品で，15世紀末～16世紀のものである。

越中瀬戸（第165～167図*923*～*977*，図版76～82）

*923*は丸椀である。口径10.6cm，器高6.7cm，底径4.4cmである。外面の体部下半は回転ケズリで，高台は逆台形の削り出し高台である。鉄釉の上から灰釉を帯状に流しかけ，高台周辺は露胎である。

924～*946*は丸皿である。口径10.0～15.0cm，器高2.2～3.8cm，底径3.6～6.3cmである。体部下半は回転ケズリで，高台は削り出し高台である。高台の外側を深く削り込んで貼り付け高台状にしたもの（*927*・*937*），断面三角形に削り出すもの（*924*～*926*・*928*～*931*・*933*・*934*・*936*・*938*～*945*），高台外側のケズリが浅く，低い碁笥底状を呈するもの（*932*・*946*），内側の削り込みが浅く高台が小さいもの（*935*）がある。*944*は見込みに「＃」の押印がある。*942*・*943*は見込みに菊の印花をもつ。*926*～*930*は高台内に墨書がある。*926*・*927*は「＋」で，*928*も一部に釉薬が付着するが「＋」か。*929*は「や」である。釉薬は，*930*は灰釉と鉄釉の掛け分け，*926*・*929*・*932*・*934*・*938*・*943*・*946*は灰釉，その他は鉄釉で，内外面上半に施釉し，見込みと外面下半が露胎となる。*925*・*930*・*934*～*938*・*942*・*943*は内面に釉止めの段があり，16世紀末～17世紀前半のものである。*945*は鉄釉を，*946*は灰釉をそれぞれ四方から浸し掛けして見込みの露胎部は方形の意匠となり，17世紀前半のものである。*941*は胎土に黒色粒を多く含むことから，17世紀前半の東黒牧窯産か。*924*・*927*・*930*・*937*・*941*・*944*は見込みに直接重ね焼

きの痕跡がある。

*947*は鉢皿で，口縁部を指で押さえて輪花風にしている。外面下半から高台内側にかけて回転ケズリを施す。高台外側も深く削り，断面三角形の創り出し高台となる。見込みに16弁菊の印花と，直接重ね焼きの痕跡が残る。外面上半から内面の釉止めの段まで鉄釉がかかる。胎土に黒色粒を多く含むことから，17世紀前半の東黒牧窯産か。

948～*952*は底部回転糸切りの皿である。全面ロクロナデで，口縁端部の作工は，丸く収めるもの（*948*・*949*・*952*），端面がほぼ水平になるよう面取りするもの（*950*），外上方に面を取るもの（*951*）がある。*948*は口径12.1cm，器高3.4cm，底径5.6cmの大皿で，*949*～*952*は口径7.2～9.0cm，器高1.9～2.7cm，底径3.2～4.1cmの小皿である。大皿は見込みを露胎とするが，小皿は内面全面に施釉する。外面は大小問わず体部下半が露胎になる。すべて鉄釉であるが，*951*・*952*は光沢のある半透明の釉である。*948*～*950*・*952*には見込みに直接重ね焼きの痕跡が残る。

*953*は向付である。口縁部は屈曲して直立する。口径10.8cm，器高3.3cm，底径6.0cmである。高台周辺に回転ヘラ削りを施し，低い碁笥底状高台を削り出している。釉は鉄釉と灰釉の掛け分けで，17世紀前半のものである。

954・*955*は火入れである。両者とも破片で，口縁部に1箇所孔が確認される。口径は約13cmである。体部は直立し，口縁部は上方に面を取る。特に外面においてロクロ目が顕著である。*954*は口縁部に，*955*は体部上半に鉄釉がかかる。

956～*958*は匣鉢の底部である。底径は9.7～11.8cmである。全面ロクロナデを施し，底外面は回転糸切りである。*956*・*958*の内底面には直径約4cmの直接重ね焼きの痕跡が残り，大きさから回転糸切りの小皿を重ね入れて焼成したものと考えられる。*956*は外面上半に，*957*・*958*は全面に錆釉が施される。

959～*969*は壺である。口径は7.4～12.8cmである。肩が張るもの（*964*・*968*）は少なく，丸みをもつ体部から緩やかに口頸部がのびるものが多い。口縁部は短く立ち上がり，端部がやや拡張して上方に面を取るもの（*960*），方頭を呈するもの（*962*・*963*・*966*・*968*），丸く収めるもの（*959*・*961*・*964*・*965*・*967*・*969*）がある。*967*は鉄釉，その他は錆釉を内外面に施釉する。

970～*976*は擂鉢である。内外面に錆釉を施す。*970*～*972*は口縁部で，口径は*970*・*971*が約27cm，*972*は約29cmである。口縁形態は縁帯が三角形を呈するもの（*970*），縁帯の下端を外方につまみ出すもの（*971*・*972*）があり，16世紀末～17世紀前半のものである。*973*～*976*は底部で，卸目を施入し，底外面は回転糸切りである。卸目の単位は，*972*は2.3cm幅に8目，*973*は3cm幅に12目，*975*は2.8cm幅に10目を数える。*976*の卸目は条が太い原体を用いて密に施入され，単位は不明である。

*977*は燭である。見込み中央に径2cmの灯芯立てが付くが欠損している。胴部内外面に鉄釉が施され，脚部は露胎である。底部は回転糸切りで，中央に孔が穿たれる。

唐津（第168・169図*978*～*1010*，図版83・84・87）

978～*996*は胎土目積期の皿である。口径は10.6～12.8cm，器高2.6～3.9cm，底径2.4～5.0cmである。灰釉が施され，外面体部下半は露胎となる。見込みに3箇所または4箇所の胎土目が残るものが多い。大半は1590～1610年製のものであるが，透明感があり緑味の強い灰釉を施した*980*・*995*は操業開始期の1580年代に遡る可能性もある。

978～*980*は底部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。底部は削り出し高台で，高台の外側も削り込んで輪高台とする。*978*は灰白色，*979*・*980*はオリーブ色系の灰釉を施す。

981～*983*は口縁部が外反し，内面にわずかに稜ができる。底外面は削り出し高台で，*981*は高台内のみを小円状に削り込んで碁笥底としている。オリーブ色系の灰釉を施す。*982*はススが付着し，灯明皿として使用されたとみられる。

*984*は体部下半で外反し，口縁部は内湾して立ち上がる。器形から胎土Ⅱ期のものとしておく。灰白色の灰釉を施す。

985～*987*は底部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。削り出し高台であるが，作工は粗雑で高台外側はあまり削り込まない。*985*・*986*はオリーブ色系，*987*は灰黄褐色の灰釉を施す。*986*はススが付着し灯明皿として使用されたとみられる。

988～*991*は口縁部が外反し，見込み周辺に明瞭な段ができる形態である。削り出し高台で，高台外側を削り込んで輪高台とするもの（*988*），高台外側はあまり削り込まないもの（*989*～*991*）があり，とくに*991*は作工が雑で，高台を削りきっていない。*988*・*991*は灰白色，*989*・*990*は灰色の灰釉を施し，*989*は内面の釉が縮れている。*991*はススが付着し，灯明皿として使用されたとみられる。

992～*996*は底部で，見込みは広く平坦である。削り出し高台で，断面三角形の碁笥底状に削り出すもの（*992*），高台外側を削り込んで輪高台とするもの（*993*～*996*）がある。*992*・*994*・*996*は灰白色，*993*は灰黄色，*995*は暗オリーブ色の灰釉を施す。*992*・*995*・*996*は高台内に，*994*は高台外側に墨書がある。*992*は「ひヵ」，*994*は「＋ヵ」，*995*は「岡ヵ」，*996*は「松□ヵ」又は「於□ヵ」である。

997～*999*は溝縁皿である。口径約12～17㎝で，口縁部が強く外反し，端部を上方に引き上げ丸く収めるもの（*997*・*998*），端部が内湾し内面に溝状の窪みをもつもの（*999*）がある。*997*・*998*は灰白色，*999*は灰黄色の灰釉を施し，*998*は内底面の釉が縮れている。1600～1630年製のものである。

1000～*1002*は砂目積期の皿である。*1000*は，見込み周辺に明瞭な段をもち，底部は碁笥底状の削り出し高台である。器形的には胎土Ⅱ積期のものであるが，見込みに砂目が残ることから，胎土Ⅱ積期から砂Ⅰ積期への移行期の製品で，1610年頃のものである可能性が高い。*1001*は碁笥底状の削り出し高台で，見込みに3箇所の砂目があり，目痕にススが付着することから灯明皿として使用されたと考えられる。*1002*は磁器風の高い削り出し輪高台で，磁器生産が行われた窯で焼かれたものと考えられる。*1000*はにぶい黄橙色，*1001*は灰色，*1002*は灰白色の灰釉を施す。*1000*・*1001*は底面下半は露胎であるが，*1002*は高台内側も施釉し，畳付の釉は剥ぎ取る。*1001*は1600～1630年製，*1002*は1610～1630年製のものである。

1003～*1008*は内野山窯製の皿である。*1003*～*1007*は，体部はやや内湾して開き，底部は高めの削り出し輪高台である。内面は銅緑釉を施して蛇の目釉剥ぎし，外面は上半に灰釉を施す。*1003*は内面と外面にそれぞれ4箇所に砂目積みの目痕があり，*1004*も一部に目痕が残ることから，これらは17世紀後半のものと考えられる。*1004*は二次的に被熱している。*1005*～*1007*は蛇の目釉剥ぎ部分に直接重ね焼きの痕跡が残る。18世紀前半の製品であるが，*1006*・*1007*は胎土が粗悪で銅緑釉の発色も悪いことから，内野山窯の末期の製品と考えられる。*1008*は，口径約18㎝のやや大振りの皿で，口縁部は外方へ折れ，端部は内湾する。内面から外面口縁端部にかけて銅緑釉，外面に灰釉を施す。17世紀後半～18世紀前半の製品である。

*1009*は皿で，口径約20㎝とやや大振りである。体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部は外反して内面に明瞭な稜をなし，端部は内湾する。黄灰色の灰釉を施し，外面体部下半は露胎である。1590～1610年製のものである。

*1010*は口径30㎝を超える大皿である。技法は三島手で，内面は直線と波線の連続文を陰刻した後に

白化粧土を塗布し，外面は下半に錆釉，上半に白化粧土を施す。焼成不良で褐色の発色が悪く，白化粧土の充填と拭き取りが不十分なため文様は不明瞭である。17世紀末～18世紀前半のものである。

伊万里（第170図*1011*～*1027*，図版71・85・86）

1011～*1018*は碗である。高台畳付以外は全面施釉する。*1011*・*1012*は一重網目文の染付で，17世紀後半のもの。*1012*は口径9.2cm，器高6.9cm，底径4.0cmで，器壁は底部に向かって厚くなる。*1013*は外面に矢羽文，高台内に圏線の染付がある。高台は細く，作工は精緻である。1660～1680年製である。*1014*は体部外面に草花文，高台部に圏線の染付がある。1690～1730年製である。*1015*は陶胎染付で，外面に省略された唐草の染付がある。18世紀前半のもの。*1016*～*1018*は体部外面に松と団鶴のコンニャク印判を施す。*1017*・*1018*は高台内に圏線と銘がある。18世紀前半のものである。

1019～*1021*は皿である。*1019*は高台部無釉で，体部外面と内面全面に青磁釉を施した後，見込みを蛇の目釉剥ぎする。高台と内面の釉剥ぎ部分に重ね焼きの際の砂が密着する。波佐見窯の製品で，17世紀後半のものである。*1020*・*1021*は内外面に染付を有し，全面施釉した後，畳付は釉剥ぎする。18世紀前半の製品である。*1020*の内面には窓絵として草花文とその外側に格子文，外面には唐草文が描かれ，高台内側には圏線の染付がある。*1021*は内面に樹木が描かれ，見込み中央にコンニャク印判の五弁花が施される。外面には直線的な唐草が描かれ，高台内には圏線の染付がある。

*1022*は筒形碗である。外面には青磁釉を施し，畳付は釉剥ぎする。内面には五弁花と圏線の染付がある。18世紀後半のもので，1770～1790年頃の製品である可能性が高い。

1023～*1025*は仏飯器である。*1023*は小型の碗の可能性もあるが仏飯器としておく。外面には草花文の染付がある。17世紀後半～18世紀初頭の製品である。*1024*・*1025*は脚部の破片だが，圏線状の染付がみられる。外面に施釉されるが，脚裾部から端部の面取りされた部分は釉が十分掛からず一部露胎となる。底外面は露胎である。底外面の作工は，*1024*はアーチ状に削り込まれており，*1025*は畳付部分を残し浅く削り込む。*1024*は17世紀後半，*1025*は17世紀後半～18世紀前半の製品である。

*1026*は小杯である。外面に染付を施し，全面施釉した後，畳付は釉剥ぎする。17世紀後半のもの。

*1027*は香炉または火入れである。体部は直線的に立ち上がり，口縁部はほぼ水平に面を取り内側に肥厚する。白磁釉を口縁部から体部外面にかけて施し，内面は露胎とする。17世紀後半のもの。

上師質土器（第171図*1028*～*1030*，図版70）

1028～*1030*は擂鉢である。口縁部は端面がやや内傾し，内面に凹線をもつ。*1028*・*1029*の凹線は緩く段をなす程度のものだが，*1030*の凹線は鋭く抉り込まれ，口縁内端部が断面三角形を呈する。卸目は凹線以下に施入され，*1030*では一単位2.0cmに９月の原体を用いる。胎土は粗い砂粒をやや多く含み，*1028*・*1029*は軟質で摩滅が著しい。

瓦器（第171図*1034*～*1036*，図版70・88）

1034・*1036*は火鉢である。*1034*は口径は約31cmで，口縁部は内湾し，端面を内側に挽き出して水平に拡張させる。胎土に微細な白色粒を多く含む。*1036*は小片で，外面に交差する平行線文が深く刻まれる。ともに焼成は軟質で，胎土は灰白色だが器面は炭素を吸着して内外面とも灰色を呈する。

*1035*は胴部径が13～14cmと小型で，香炉である。隆帯を貼り付け，唐草文のスタンプを連続押捺する。外面はミガキで黒色処理され，内面はヨコナデを施す。

土製品（第171図*1031*～*1033*，*1037*～*1051*，図版88・89）

1031・*1032*は円筒形土製品である。残存部の最大径は*1031*が約12cm，*1032*が約13cmである。全形を知り得ないが，器厚はほぼ一定で，端部がやや窄む円筒形を呈する。端部は粗雑なケズリで面を取る。

粘土輪積み成形で，*1031*は外面は縦方向のヘラケズリ，内面は粗い縦方向のハケメ調整を施すが，内面に粘土接合痕が顕著に残る。*1032*は内面に丁寧なヨコナデを施すが，外面のナデ調整は粗く，外面に粘土接合痕が残る。胎土は粗い砂粒・礫粒を多く含み，焼成はやや軟質である。

*1033*は置き竈か。底部は端面を内側に拡張させる。胎土は粗い砂粒・礫粒を多く含む。焼成があまく軟質で，摩滅が著しく調整は不明であるが，底部周辺は指頭で押さえて成形している。

1037～*1051*は土錘である。*1037*・*1038*は球型，*1039*～*1051*は樽型を呈し，*1047*・*1049*は端部に面を取る。大きさは，完形のものでは*1039*が長さ3.4cm，幅3.0cm，孔径1.0cm，重量28.7ｇ，*1043*が長さ5.0cm，幅4.2cm，孔径1.2cm，重量69.3ｇ，*1047*が長さ6.0cm，幅4.7cm，孔径1.6cm，重量102.0ｇ，*1049*は長さ6.6cm，幅4.9cm，孔径1.5cm，重量119.5ｇで，他は欠損している。

（2）木製品

下駄（第172・173図*1053*・*1058*・*1061*・*1062*，図版91・92）

*1053*は連歯下駄で，平面形は小判形で，横緒穴は後歯の前方に穿たれる。*1058*は無歯下駄で後壺周辺を楕円形に刳りぬく。割れを補修するためか，釘が斜めに打ち込まれている。裏面の一部に赤色漆が残る。*1061*は露卯下駄である。平面形は長方形で，台裏は４辺に向かって削り落とされる。両歯とも２本柄で結合され，横緒穴は後歯より後方に穿たれる。*1062*は陰卯下駄である。台・歯とも欠損している。材は，*1053*はニヨウマツ類，*1058*はスギ，*1061*はケンポナシ属，*1062*はモクレン属である。

漆器（第174図*1068*・*1077*，図版93）

*1068*はゆるやかに立ち上がる総黒色系椀である。高台はベタ底で露胎であり，ロクロの爪痕がある。炭粉渋下地である[注3]。12世紀後半～13世紀前半のものである。材はケヤキである。

*1077*は根付である。瓢箪をかたどったもので，管状に孔が通り，中央に切り込みがある。外面赤色漆塗りである。材は広葉樹である。

円形板（第182図*1206*～*1208*）

*1206*は，断面に材を結合するための木釘孔がある。*1207*・*1208*は小型のもので，*1207*は一方の面には縁辺部を除いて縄み皺のある漆が付着し，生漆を入れた容器の底板と考えられる。材は，すべてスギである。

栓（第187図*1240*，図版94）

*1240*は断面が逆台形の円錐状で樽の栓と考えられる。材はスギである。

（3）石製品

石皿（第203図*1354*，図版110）

長さ22.7cm，幅18.5cm，厚さ5.2cm，重量は3.14kgである。石材は安山岩である。縁を残して，断面が緩やかな弧状となる皿部を敲打成形によってつくり出し，一方は掻き出し口としている。掻き出し口の両端には，対となる把手状の突起がある。底外面は中央部がほぼ平坦で，縁辺部は緩く反り上がる。一方の側縁の中央部から掻き出し口の中央に向かって，敲打を連続させたような浅い溝状の凹みがあり，突起部分を囲むようにして底外面にも一定幅の溝状の窪みが巡る。出土地点はＥ地区の表土であるが，Ｅ地区では包含層から縄文時代前期後半の縄文土器が出土していることや，*1354*と形態が類似する北海道千歳市キウス４遺跡等出土のオロシガネ状石製品が縄文時代後期に位置づけられていることから，*1354*も縄文時代の遺物と考えておく[注4]。

石鏃（第203図*1357*・*1359*～*1361*，図版111）

*1357*は柳葉式石鏃である。*1359*～*1361*は無茎円基式石鏃で，側縁形状は外湾型である。石材は*1357*・

注3　第二分冊　自然科学分析　埋蔵文化財センター発掘調査　10「塩釜神社内遺跡出土遺物の科学分析」
注4　桑　原康　2005「中福泉坂遺跡内遺跡出土の石製品について。」『紀要　富山考古学研究』第６号　財団法人富山県文化振興財団

*1360*が安山岩，*1359*が流紋岩，*1361*が凝灰質泥岩である。

磨製石斧（第204図*1362*・*1364*～*1368*，図版112）

刃部の残るものはすべて蛤刃状の両刃である。両側縁は*1367*が平行となる他はすべて刃部に向かって広がる。*1368*は全長3.6cm，幅1.4cm，厚さ0.55cmで，小型品である。*1365*の側縁はほぼ打ち欠いたままの状態で，研磨が不十分である。石材は，*1362*が流紋岩，*1364*・*1365*・*1367*・*1368*が蛇紋岩，*1366*が砂質凝灰岩である。

石錘（第204図*1369*・*1370*，図版110）

*1369*は短軸方向に溝が一周する有溝石錘で，敲打成形により楕円形に近い球形をなす。石材は安山岩で，重量は299.6ｇである。*1370*は，三角錐状の自然礫の頂部周辺を溝状に抉り込み，縦方向の角を削り取るよう研磨する。石錘として使用したものか。石材は凝灰岩で，重量は140.8ｇである。

管玉未製品（第204図*1371*，図版112）

管玉の形剥工程品で，断面が長方形の四角柱状の未製品である。石材は凝灰質泥岩である。

紡錘車（第204図*1372*，図版111）

扁平な楕円形の礫を研磨して平滑にし，中央に両面から穿孔する。石材は泥岩である。

硯（第205図*1375*・*1376*・*1379*，図版113）

*1375*は石材は泥岩で，高嶋硯である。硯面は磨られて中央に向かって薄くなる。*1376*は幅１寸５分の嶺中硯で，石材は粘板岩である。近世のもので，高嶋産の可能性が高い。２枚に割れており，一方は裏面が剥離している。*1379*は鈍角で不整形だが，硯か。

砥石（第206・207図*1381*・*1384*～*1386*・*1388*・*1390*～*1396*・*1400*～*1402*・*1405*・*1406*・*1409*，図版114）

1381・*1388*は凝灰質泥岩で，仕上げ砥の鳴滝砥中山である。*1388*は幅１寸２分で平均的な大きさである。*1391*は凝灰岩で，在地産または上野砥とみられ，近世の仕上げ砥である。

*1392*は凝灰岩で天草砥慳水の可能性が高い。裏面は破損しているが摩耗しており，破損後も使用されている。置き砥を手持ち砥に転用したと考えられる。*1393*は凝灰岩で天草砥である。方柱状を呈するが，主要な砥面は表裏２面で砥面は傾斜している。*1394*は凝灰質砂岩の中砥で，天草砥慳水か。方柱状を呈し，表裏・側面の４面を砥面としている。近世のものか。*1405*は凝灰岩で天草砥か。

方柱状で４面を砥面とし，３面が深く湾曲する。小口には生産地での加工痕を残す。

1384～*1386*・*1390*・*1395*・*1406*・*1409*は凝灰岩で中砥の伊予砥か。天草砥との識別が難しいが，10世紀～13世紀頃に安定して流通する伊予砥の可能性がより高い。*1390*の主要な砥面は正面で裏面は破損しているが，破損後も使用し深い線状痕が残る。*1395*は一方の小口を破損しているが，他の表裏・側面・小口を砥面として使用している。側面の砥面は深く湾曲し，鎌等を研いだものと考えられる。*1406*は方柱状で４面の砥面が捻れるように波打つ。*1409*は板状で表裏・側面を砥面とするが，主要な砥面は１面で，深く湾曲している。

*1400*は凝灰岩で信州産の中砥か。側面には生産地で切り割った際の段が残る。近世後半～近代の可能性が高い。

*1401*は凝灰岩だが石英質が多く，砥石に向かない石質であるが，中砥石あるいは自然礫を砥石として使用した可能性も考えられる。いずれにしても広域流通品ではない。側面と，破損した正面の一部に砥面が残る。*1402*は凝灰岩の中砥で近世以降と考えられる。方柱状で表裏・側面を砥面とする。

*1396*は砂岩で，荒砥の大村砥であり，中世のものである。主要な砥面は表裏である。

（4）金属製品

銭（第208・209図*1410・1411・1413～1426・1428～1431*，図版116）

*1410・1411*は開元通寶である。唐銭で，初鋳は621年（武徳４）であるが，1350年頃には本邦でも模鋳される。*1413～1418*は北宋銭である。*1413*は天禧通寶で1017年（天禧元）に鋳られた。*1414*は景祐元寶で1034年（景祐元）に鋳られた。*1415*は皇宋通寶で初鋳は1038年（寶元元）であるが，本邦でも1340年頃に模鋳される。*1416・1417*は元豊通寶で初鋳は1078年である。*1416*は篆書体，*1417*は行書体である。*1418*は聖宋元寶で1101年（建中靖国元）初鋳であるが，本邦でも中世に模鋳される。*1419～1426・1428～1430*は寛永通寶である。*1428・1429*は1668年（寛文８）以降に鋳られた背文銭である。*1430*は1768年（明和５）年以降に鋳られた当四銭で，裏面に波文を有する。*1431*は４枚が癒着しており銭文は不明である。

小柄（第209図*1432～1435*，図版115）

すべて銅製で，長さは*1432～1434*が9.2㎝，*1435*は10.0㎝である。*1432*は両面と棟方に約1.1㎝間隔の線刻を施す。線刻は端の部分程工具の当たりが強く，地板を折り曲げ成形した後に施されたものと考えられる。*1433・1434*は無文である。*1435*は魚々子地に流水文を施す。

笄（第209図*1436*，図版115）

銅製で，先端に耳掻がつき，胴部には透かしがある。透かしの両端は木瓜形に切り込んでいる。穂先は尖っている。

飾り金具（第209図*1437*，図版115）

銅製で，わずかに鍍金がのこる。調度品等の角の３面を包むように折り曲げ，９箇所を目釘で留める飾り金具であるが，現状ではやや開いている。天面の角は左右合わせるため45°に切断される。折り曲げは緩やかで鋭い稜はない。３方に広がる花弁状の文様を線刻し，周囲を梅文の型打ちで埋めている。細密な梅文で，放射状のおしべも表現されている。

引手金具（第209図*1438*，図版115）

襖の引手金具で，本体と，本体の表面に貼り付けたとみられる化粧板からなる。長軸は4.9㎝で，花菱形を呈する。銅製で，化粧板の表面には鍍金がわずかに残る[注22]。化粧板は平坦であるが，本体の面は丸く湾曲している。本体側面には短軸方向の両端に目釘孔がある。側面の長軸方向の下端には底板を挟むための爪が付くが，一方は欠損している。

煙管（第210・211図*1439～1443・1445～1451・1453～1458・1460～1466*，図版116～118）

*1439～1443・1445～1449*は雁首である。*1439～1443・1445・1446*は脂返しが湾曲する河骨形で，*1446*のみ肩付である。*1446*は雁首に被せるようにして，肩付の吸口を直接はめ込んでいるが，吸口の中には竹の羅宇が遺存しており，吸口は肩以外の部分が裂けている。*1442*には竹の羅宇が遺存する。*1445*は火皿に空気孔がある。*1439・1446*にはわずかに鍍金が残る。*1447～1449*は脂返しの湾曲がほとんど無いもので，18世紀以降のものである。

*1450・1451・1453～1458・1460～1466*は吸口である。*1454*は断面六角形を呈する。*1466*は肩付である。*1458・1461・1465*はわずかに鍍金が残る。*1454・1457*の中には羅宇の竹が遺存する。

鉄鍋（第212図*1468～1470*，図版119）

*1468・1469*は鉄鍋の脚部である。*1468*は包含層，*1469*は昭和の圃場整備以前の道路に伴う穴（ＳＰ4003）から出土した。

*1470*は鉄鍋の把手か。円形の孔が３箇所あるが，弦をかけるための孔か。周縁にも半円形の抉り込

注22　第二分析　自然科学分析　財団法人元興寺文化財研究所　「中尾帆保谷内遺跡出土金属製品の蛍光X線分析」

みがある。2つの孔を繋ぐ紐状の痕跡がある。鉄製である[注73]。

針（第212図*1471*，図版119）

長さ13.8cmの大型の針である。鉄製で，断面は直径5㎜の円形で針穴周辺は薄く扁平である。

轡（第213図*1473*～*1476*，図版120）

1473・*1474*は素環状鏡板付轡である。*1473*の鏡板は直径5.2cmで，断面は直径0.5cmの円形である。銜は2連で断面は1.3cm角の方形を呈し，長さはそれぞれ7.3cmと7.1cmである。鏡板に連結する衝先と輪違は扁平で厚さ2～5㎜に延ばされ，輪違は幅も細くしている。一方の衝先は使用により開口したため鏡板が欠落したものと考えられる。*1474*の鏡板は直径5.5cmで，断面は直径0.6cmの円形である。銜は長さ7.7cmで，断面は1.5cm×1.3cmの方形を呈する。衝先と輪違のつくりは*1473*と同様である。金属成分分析によれば，*1473*は炭素含有量の異なる複数の鉄素材を鍛打成形した鍛造品で，始発原料は砂鉄である[注74]。また，放射性炭素年代は1標準偏差で較正した年代値で16世紀第2四半期～17世紀前半である[注75]。*1475*・*1476*も輪状を呈し，*1473*・*1474*と形状が似ており素環状鏡板の可能性が高い。*1476*は直径6.3cm，*1475*は現状で直径5.3cm，重ね合わせた部分が3.2cmである。*1475*は切断した一部を重ね合わせて締め直し，再利用したものと考えられる。*1475*・*1476*は蛍光X線分析を行い，鉄が主成分として検出された[注73]。

馬鍬の歯（第213図*1477*～*1481*，図版120）

1477～*1479*は大型で，*1478*は長さ18.6cm，幅は頭部で2.2cmである。*1478*・*1479*は，頭部は扇状に広がり端面はつぶれて拡張し，先端部は鑿頭状を呈する。*1480*・*1481*は小型で，*1480*は長さ9.9cm，頭部の幅は1.9cmである。民俗例の手馬鍬・振馬鍬等の小型の馬鍬か。頭部はL字状に曲げられている。頭部から先端部まで厚みはほぼ一定である。*1478*・*1479*は下半分が，*1480*・*1481*は下部2/3程が摩耗している。金属成分分析によれば，*1478*・*1479*は炭素含有量の異なる複数の鉄素材を，鍛打成形した鍛造品（*1478*），折り返し鍛錬した鍛造品（*1479*）である[注76]。*1478*は断面に割れがみられ，鍛接が不十分と考えられる。*1479*は*1478*に比べ炭素量が多く，硬く丈夫であったと考えられる。放射性炭素年代は，*1478*が15世紀第1四半期，*1479*が15世紀第3四半期である[注75]。

鑿（第214図*1483*・*1484*，図版119）

1483・*1484*ともに，首の断面は円形，穂先は長方形を呈するが，*1483*は穂先が厚手で，*1484*はやや華奢なつくりとなっている。*1483*は口金がはめられ，内部に木質が遺存する。

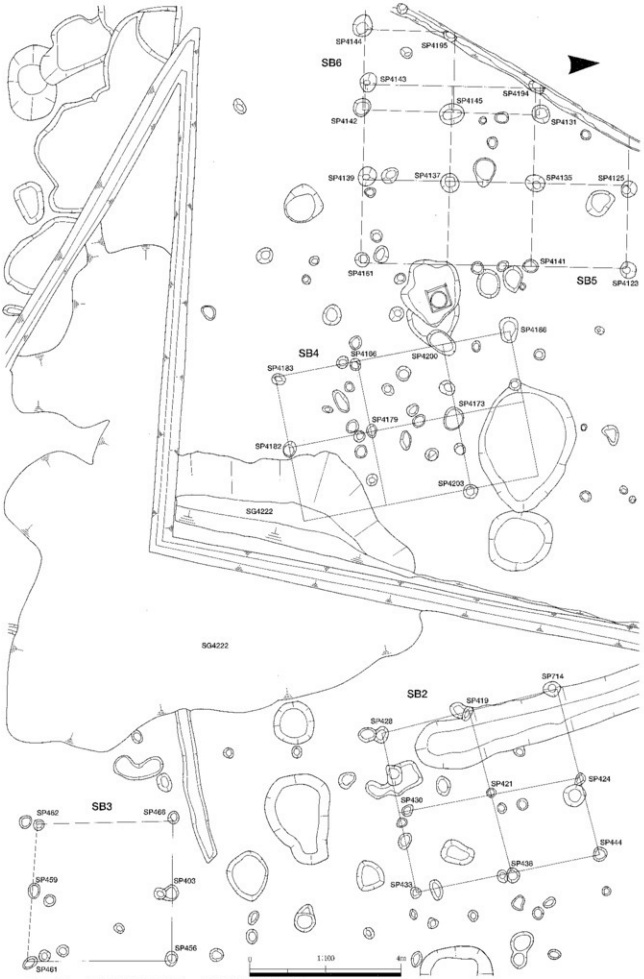
用途不明品（第214図*1487*，図版120）

*1487*は真鍮製で[注73]，口径7.2cm，器高2.8cmである。腰が張り，外面に沈線をもつ。器壁は薄く1㎜以下の部分もあるが，口縁部はわずかに厚くなり，上端に面を取る。平底で底径は2.8cmである。用途は不明であるが，仏具の一種，塗子か。表土から出土した。

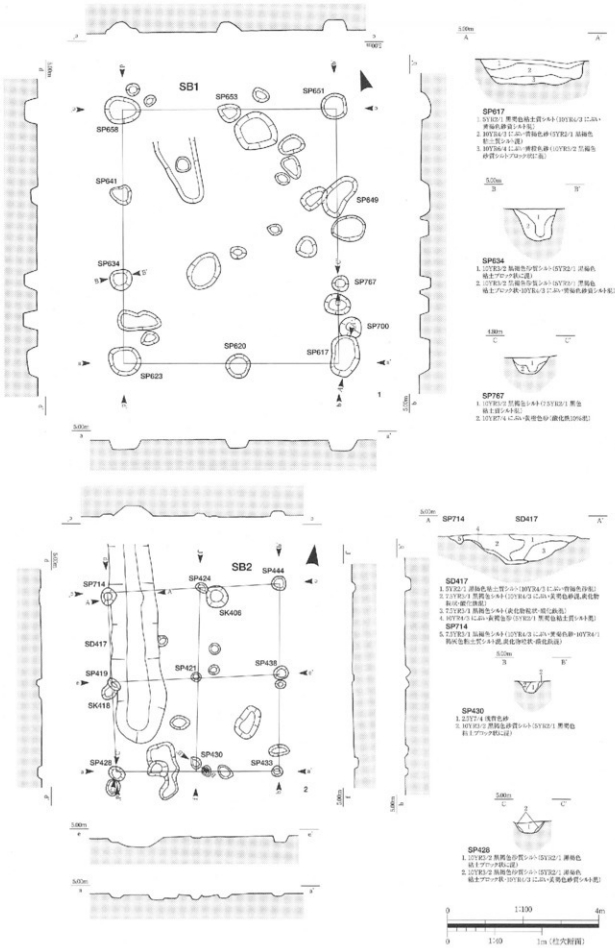
鉄滓（第214図*1489*）

*1489*は，217.5ｇで，椀形を呈する。磁石に対する反応は微弱で，形状から鍛冶滓と考えられる。

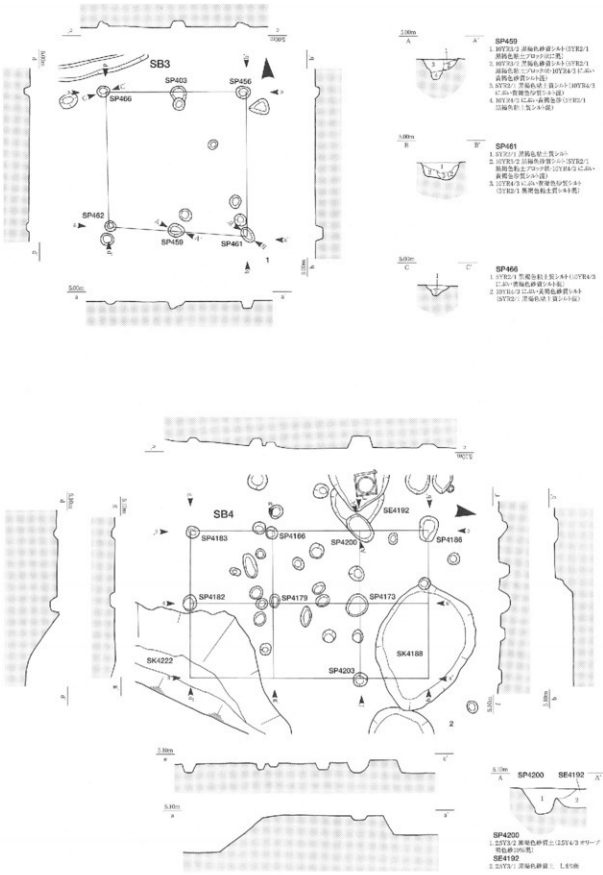
注73　第二分析　自然科学分析　財団法人元興寺文化財研究所　「中尾新保谷内遺跡出土鉄製品の蛍光X線分析」
注74　第二分析　自然科学分析　財団法人元興寺文化財研究所・株式会社丸善テクノリサーチ㈱センター　「中尾新保谷内遺跡出土鉄製品の金属学的調査」
注75　第二分析　自然科学分析　財団法人加賀市文化財調査団　「中尾新保谷内遺跡出土金属製品の放射性炭素年代測定」



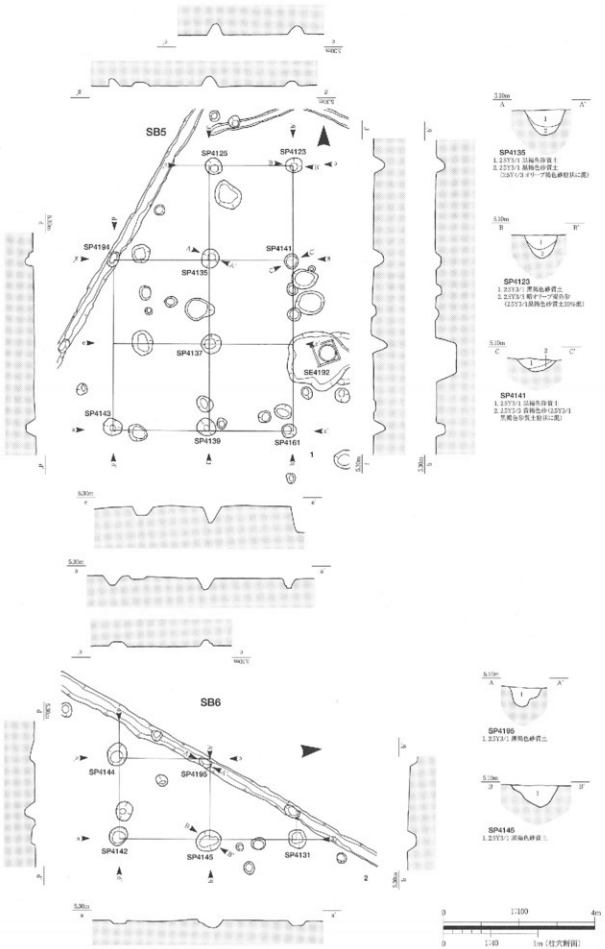
第34図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SB2～SB6



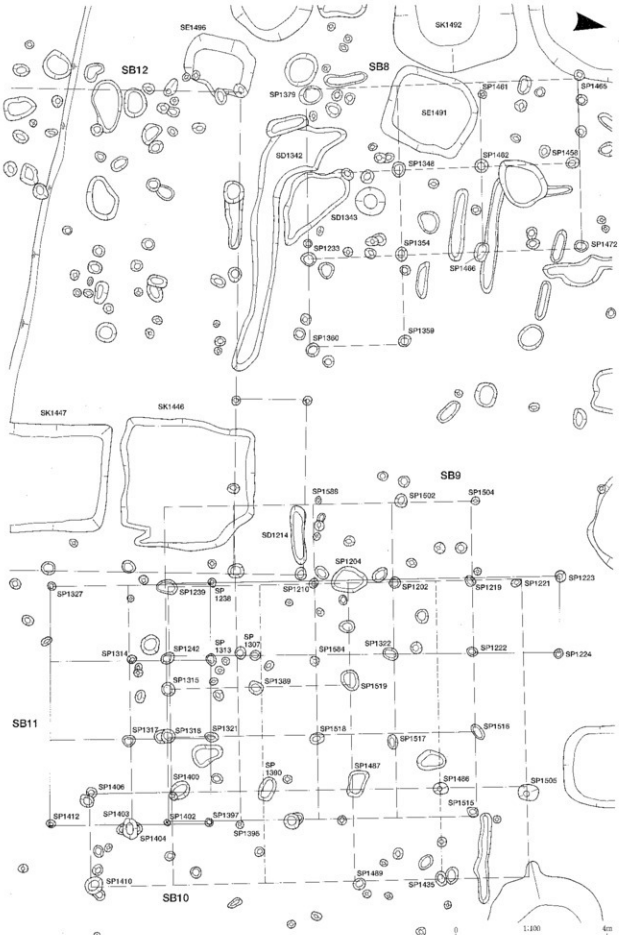
第35図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB1・SP700　2. SB2・SD417・SK406・SK418



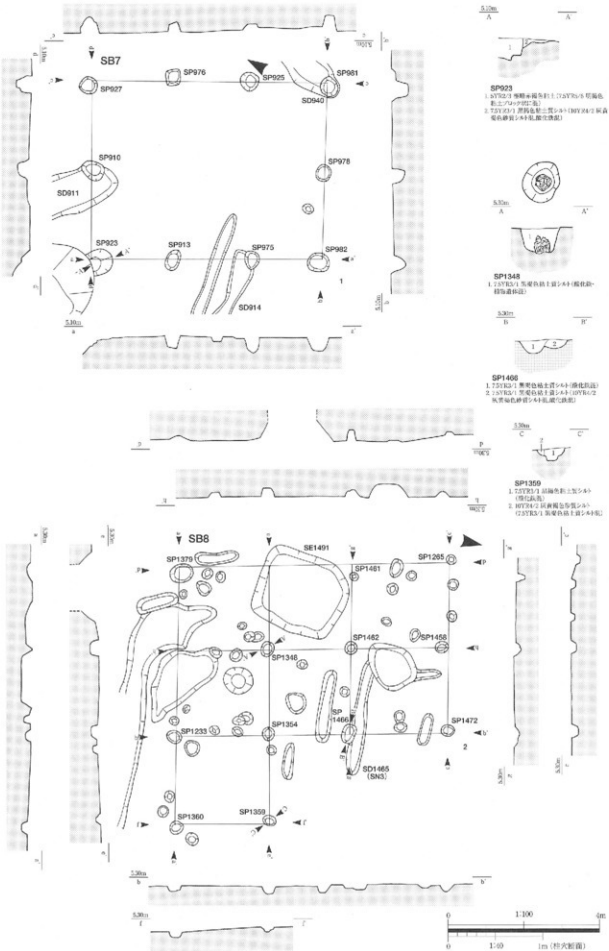
第36図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB3　2. SB4



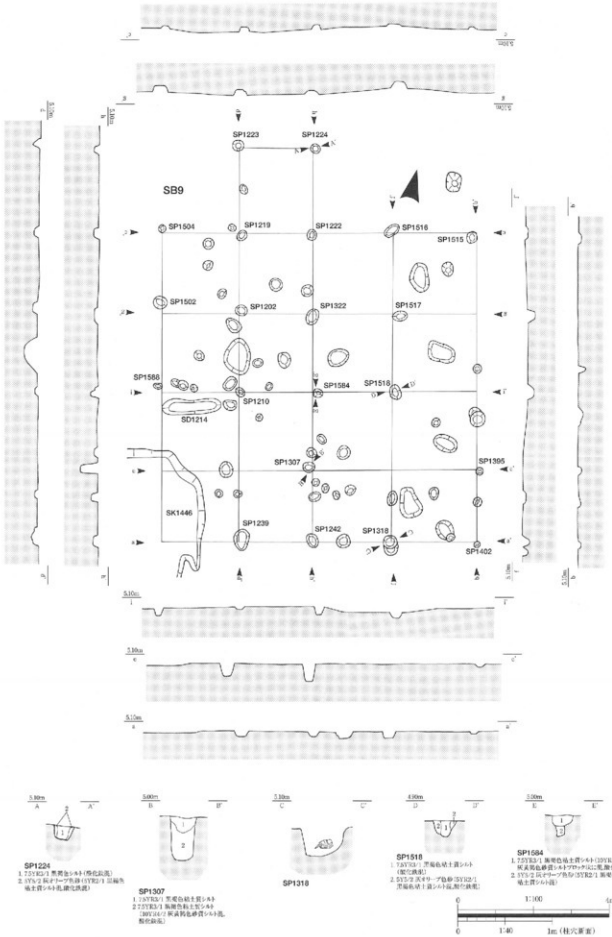
第37図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB5　2. SB6



第38図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SB8～SB12

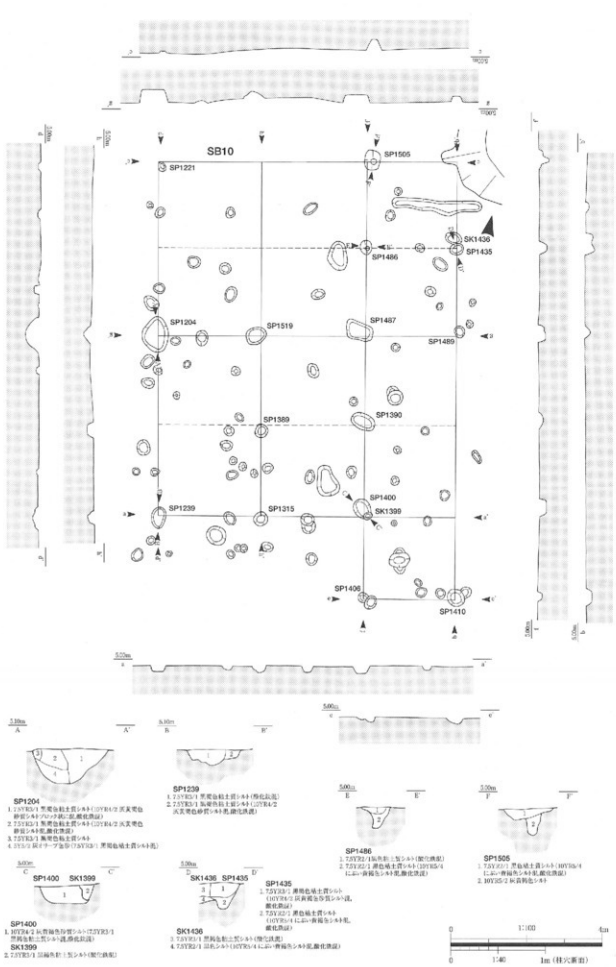


第39図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB7　2. SB8

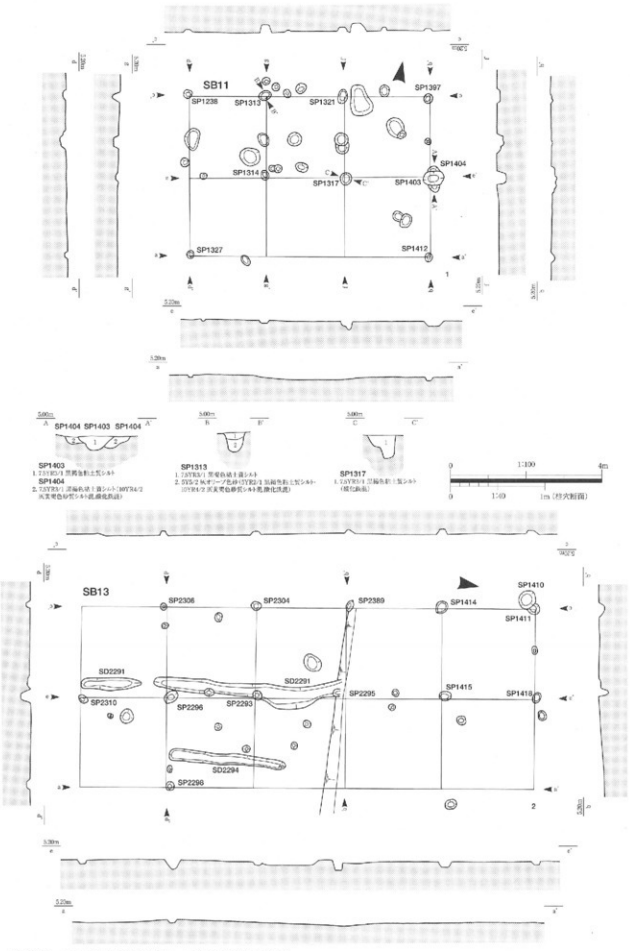


第40図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SB9

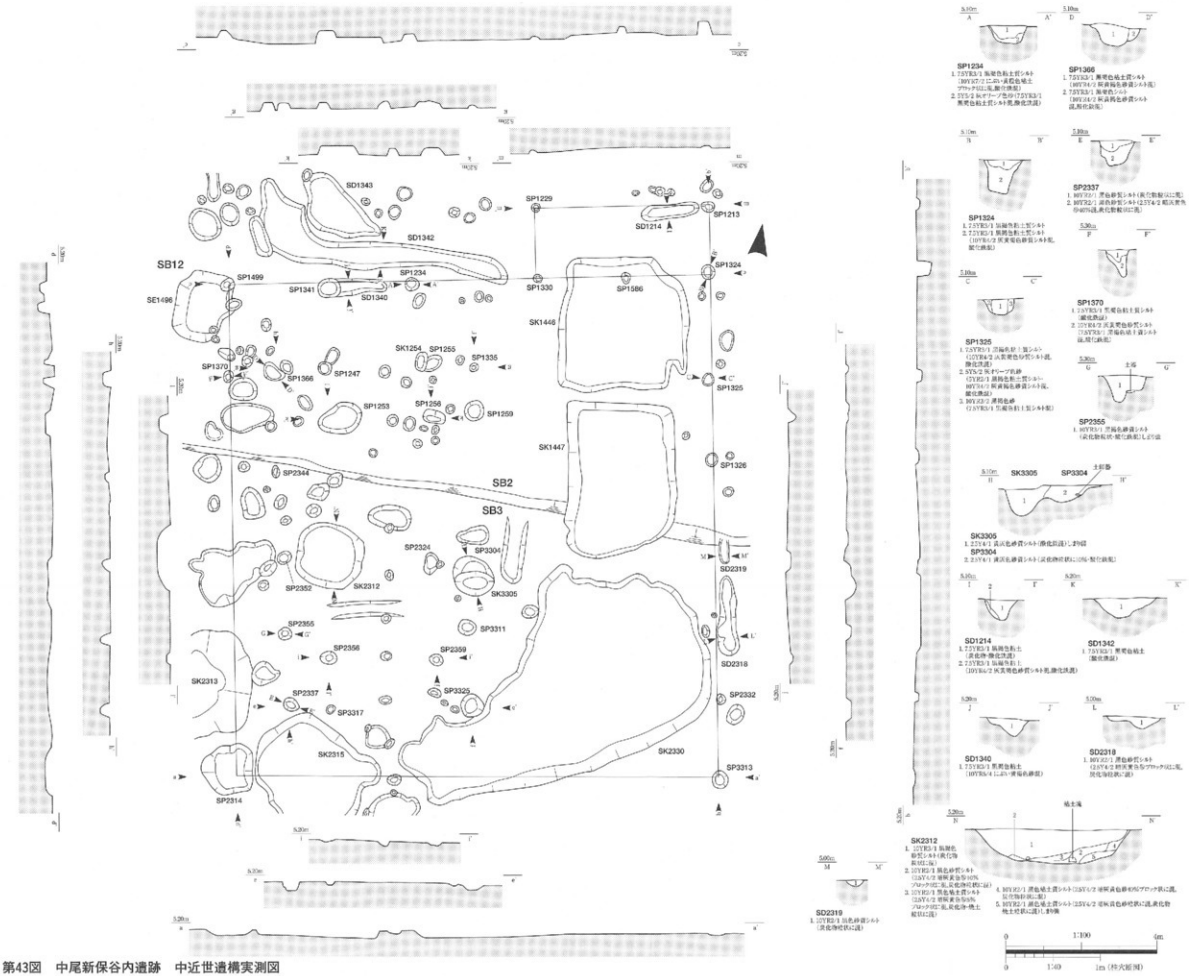


第41図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SB10・SK1399・SK1436



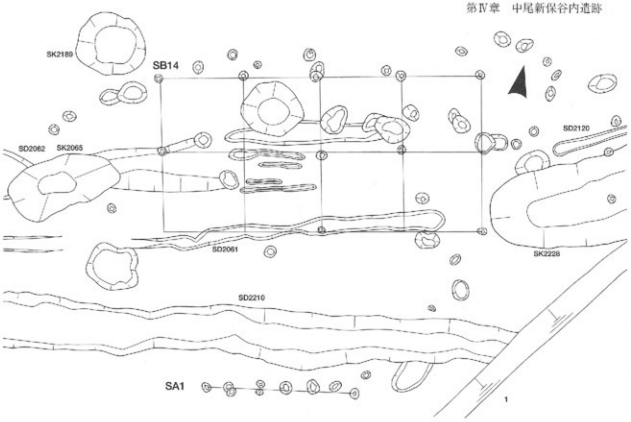
第42図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

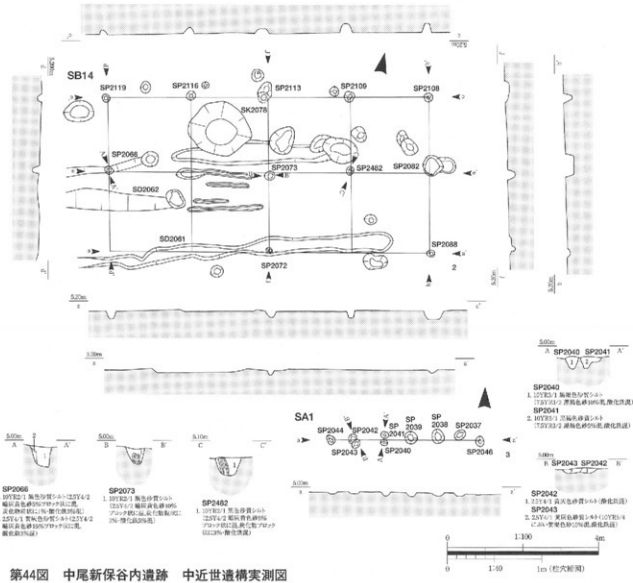
1. SB11　2. SB13



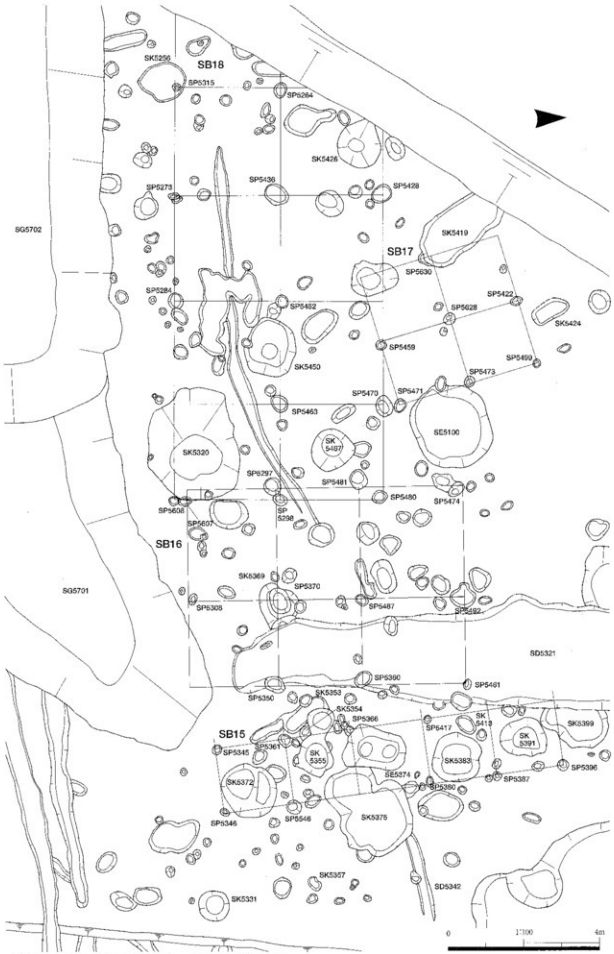
第43図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SB12・SD1214・SD1340・SD1342・SD2318・SD2319　SK1254・SK1446・SK1447・SK2312・SK2330・SK3305

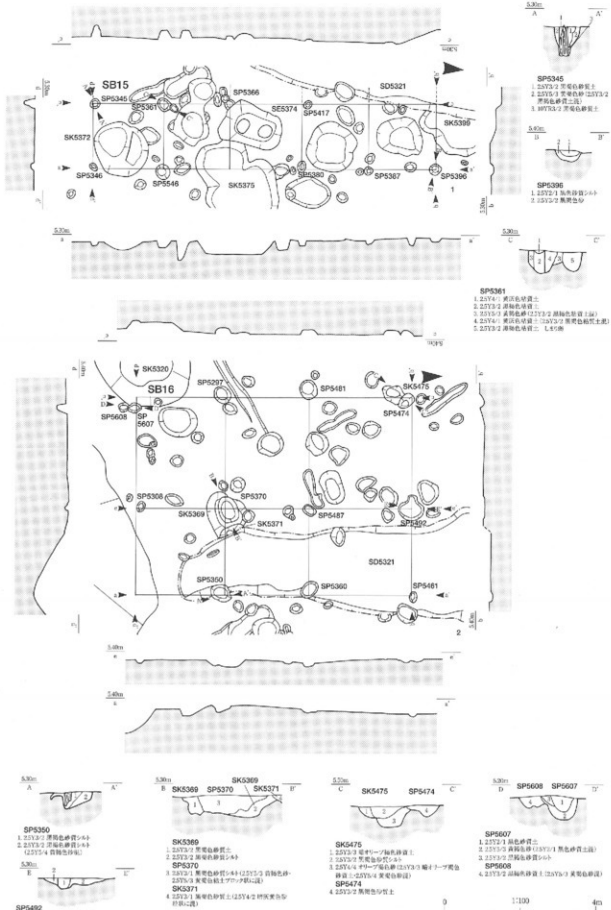




第44図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB14・SA1　2. SB14　3. SA1

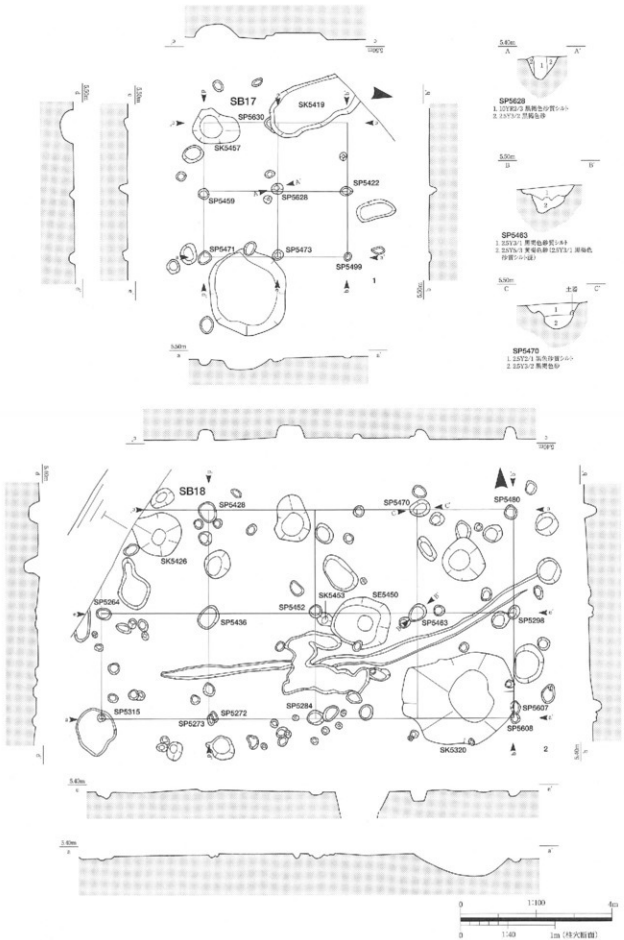


第45図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SB15～SB18・SD5321



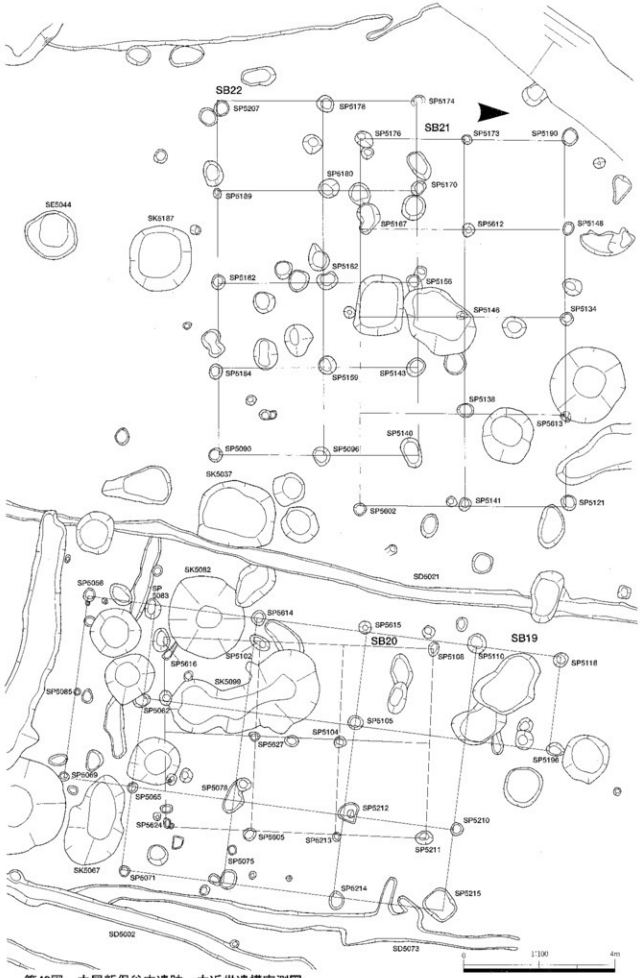
第46図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SB15　2. SB16・SD5321・SK5369・SK5371・SK5475

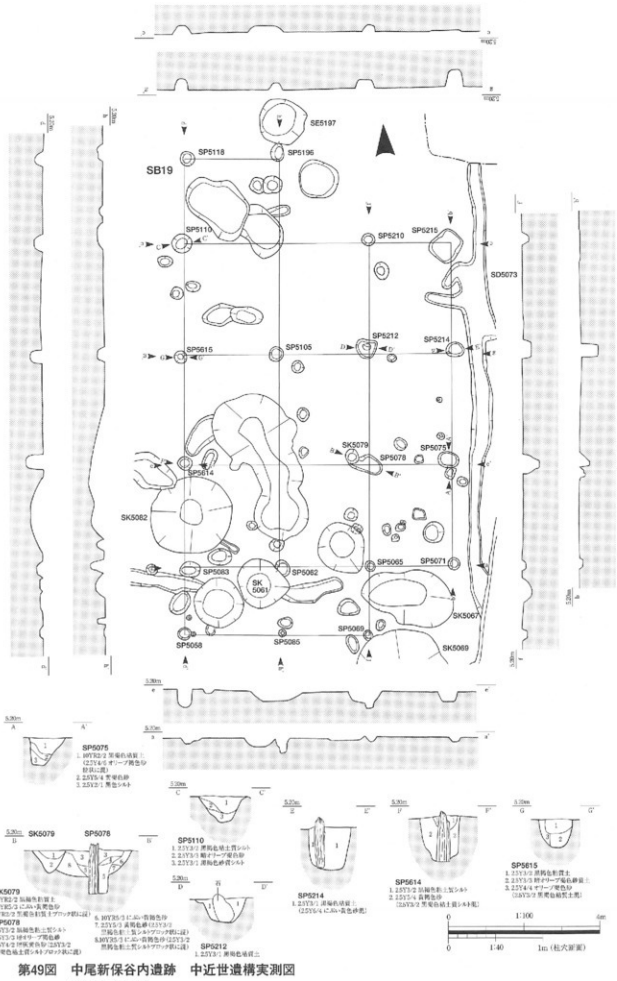


第47図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SB17・SK5419　2. SB18・SK5272・SK5453

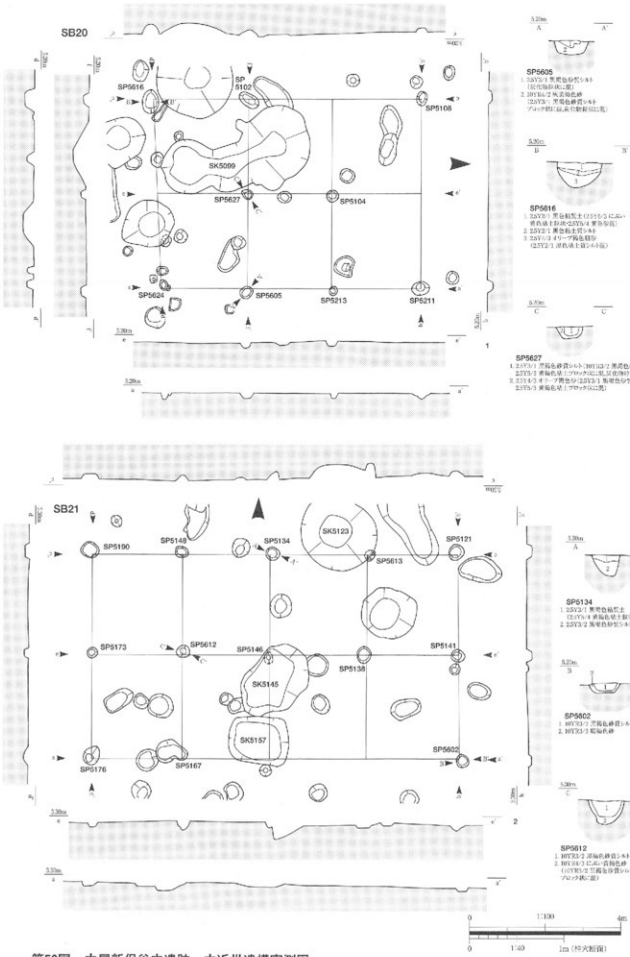


第48図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SB19～SB22

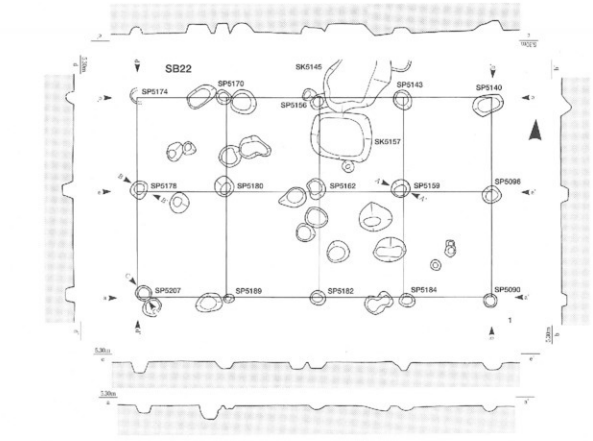


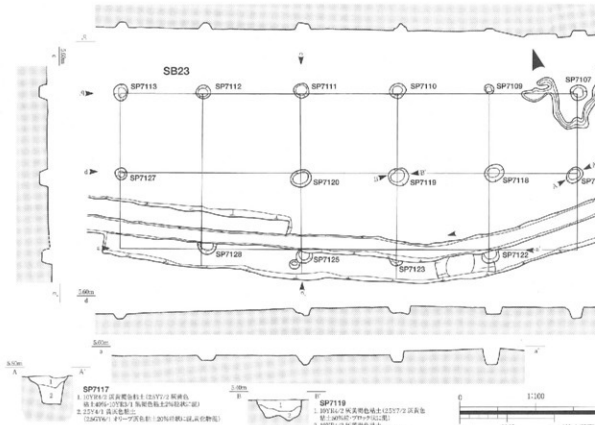
第49図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SB19・SK5079



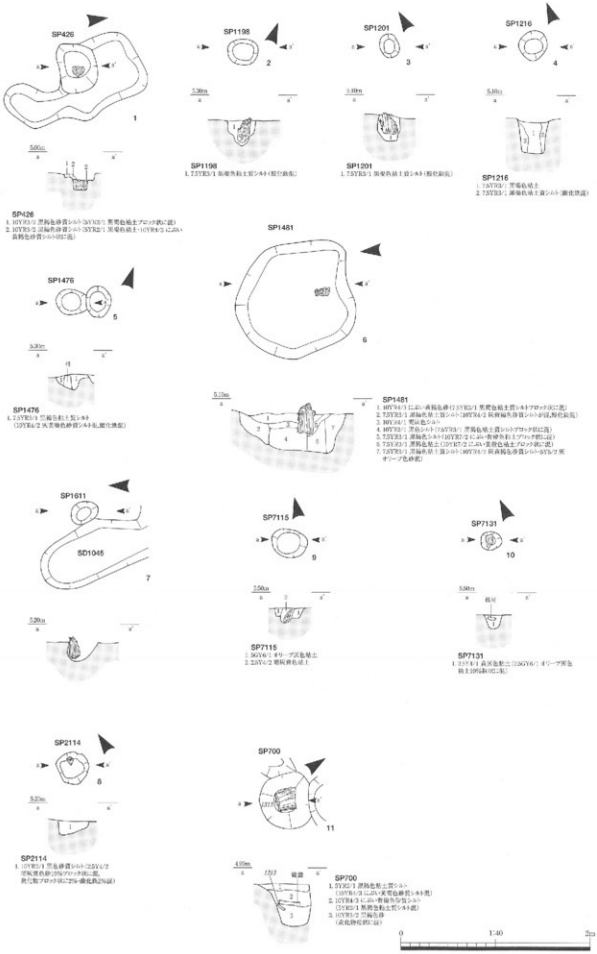
第50図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SB20　2. SB21





第51図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

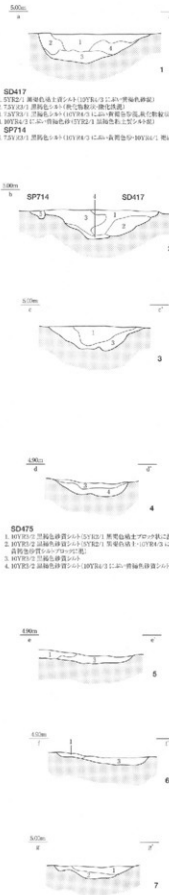
1. SB22　2. SB23



第52図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SP426　2. SP1198　3. SP1201　4. SP1216　5. SP1476　6. SP1481　7. SP1611　8. SP2114　9. SP7115　10. SP7131　11. SP700

第53図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SD417・SD475・SD4106・SD4107・SD4148・SD4156



第54図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

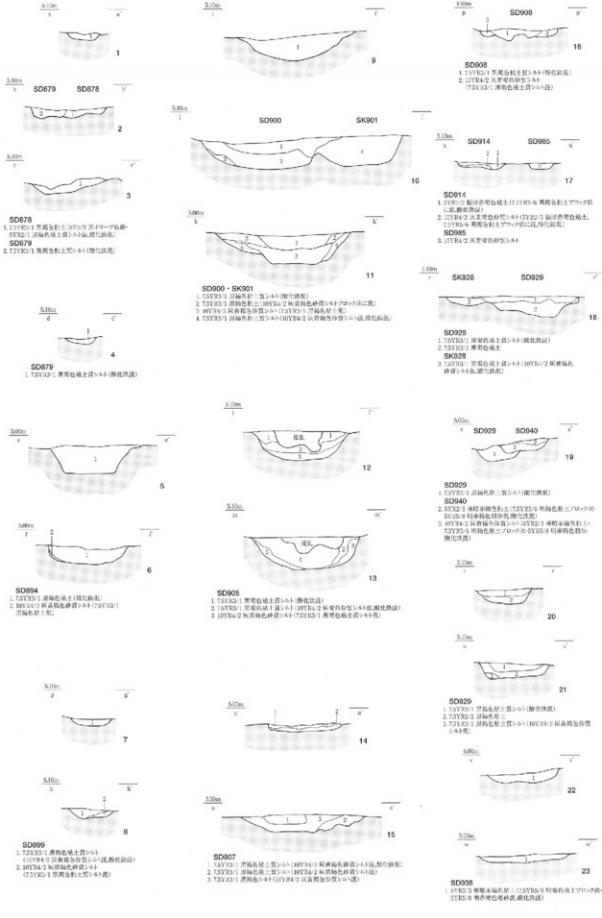
1～3. SD417　4～9. SD475　10. SD4106　11. SD4107　12. SD4148　13・14. SD4156

第55図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1・2. SD468　3. SD498　4・5. SD529　6. SD528　7・8. SD551・SD552　9. SD552　10. SD804・SK805
11. SD806　12・13. SD860　14・15. SD869　16～19. SD875

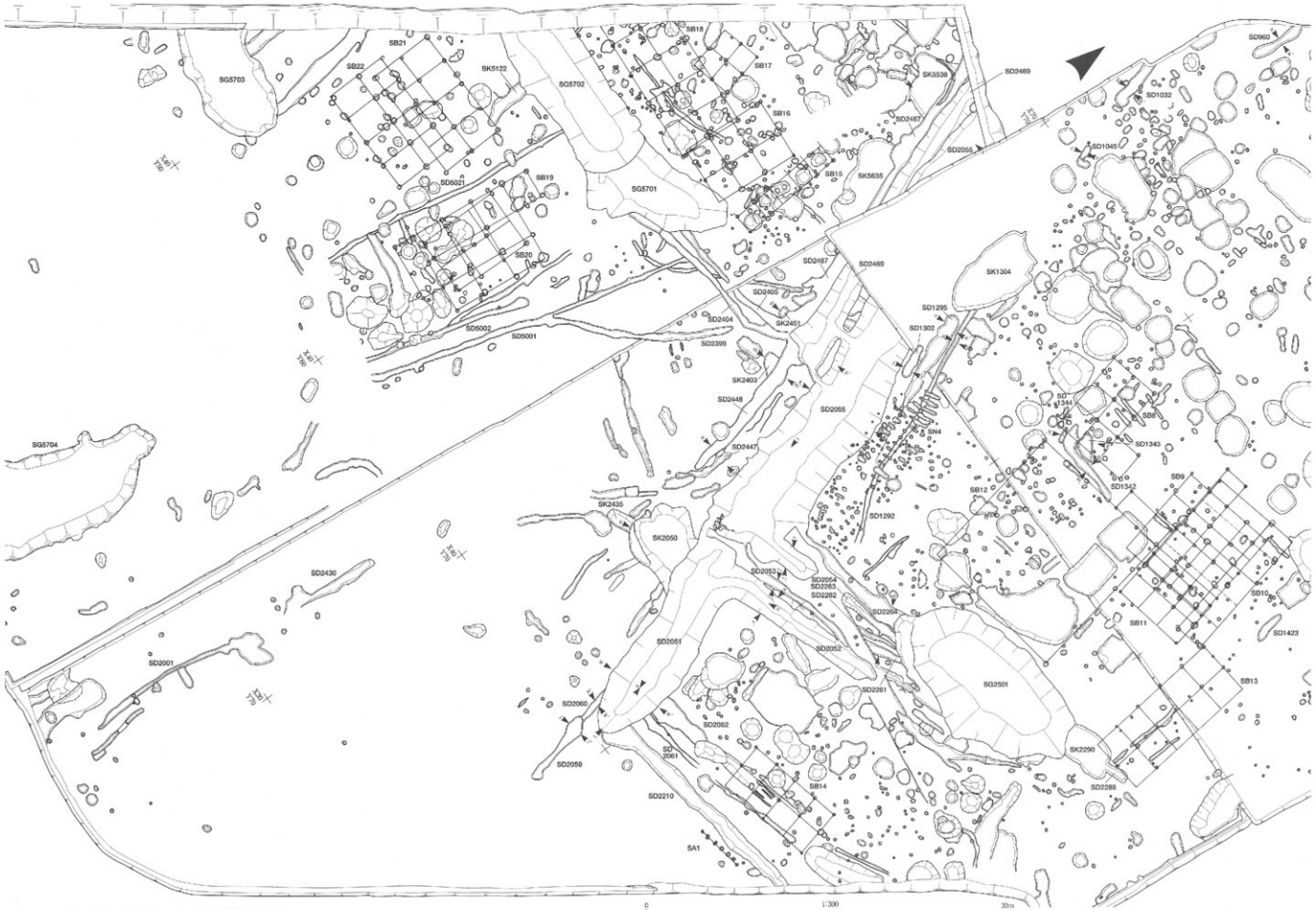
第56図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SD878・SD879・SD894・SD899・SD900・SD905・SD907・SD908・SD914・SD929・SD938・SD940・SD985
SK901・SK928



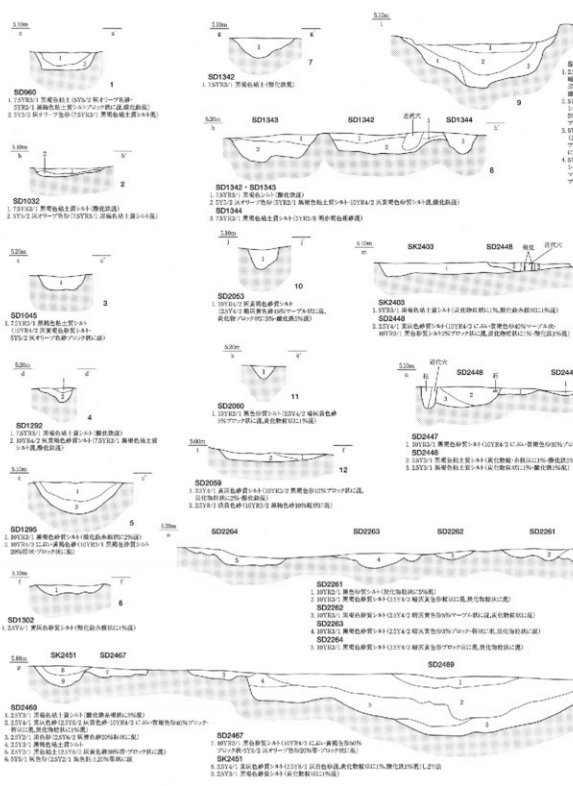
第57図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1・3. SD878　2. SD878・SD879　4. SD879　5・6. SD894　7・8. SD899　9・11. SD900
10. SD900・SK901　12・13. SD905　14・15. SD907　16. SD908　17. SD914・SD985　18. SD929・SK928
19. SD929・SD940　20・21. SD929　22・23. SD938



第58図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SD960・SD1032・SD1045・SD1292・SD1295・SD1302・SD1342～SD1344・SD2051～SD2055・SD2059・SD2060
SD2261～SD2264・SD2447・SD2448・SD2467・SD2469　SK2050・SK2403・SK2451

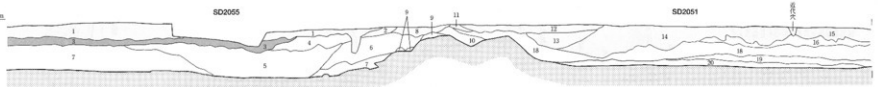


第59図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

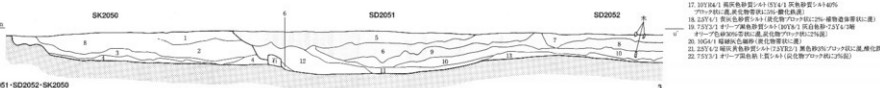
1. SD960　2. SD1032　3. SD1045　4. SD1292　5. SD1295　6. SD1302　7. SD1342　8. SD1342～SD1344　9. SD2054　10. SD2053　11. SD2060　12. SD2069　13. SD2447・SK2403　14. SD2447・SD2448　15. SD2261～SD2264　16. SD2467・SD2469・SK2451　17. SD2055・SD2467・SD2469・SK5538

第60図　中尾新保谷内遺跡　中近世堆積実測図

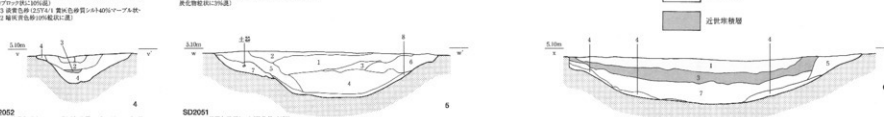
1. SD2051・SD2055　2. SD2051　3. SD2051・SD2052・SK2050　4. SD2052
5. SD2051　6. SD2055



SD2051・SD2055
1. 2.5Y5/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(撹乱痕跡)
2. 2.5Y2/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y5/2 暗灰黄色砂40%混入程度)
3. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(顕著な鉄斑)
4. 2.5Y5/6 明赤褐色(5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト30%マーブル状に混入)
5. 10YR3/1 黒褐色シルト(機能面25%遺しより強
6. 10YR3/1 黒褐色シルト(2.5Y3/1 黒(は色砂25%程度)に混入程度に含む)
7. 7.5Y5/1 オリーブ黒色粘土(炭化物密集・植物遺体1%混)
8. 2.5Y5/1 灰白色砂(5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト10%等含に混)
9. 5Y3/1 2.5 黒色砂
10. 2Y4/2 黒オリーブ色砂(2.5Y3/1 黒(は色砂40%マーブル状に混)
11. 7.5Y4/4.5 褐色色粘(1質シルト・質(は粘質混)
12. 2.5Y5/4 淡黄色砂(2.5Y5/1 青褐色砂40%混入程度(は含む)
13. 2Y4/2.5 暗オリーブ褐色砂(2.5Y5/1 青褐色砂40%混入程度(は含む)
14. 2.5Y5/1 灰白色砂質シルト(2.5Y5/2 暗灰黄色砂40%混入程度(は含む)
15. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y5/1 灰白色砂質シルト50%等程に混入程度(は含む)
16. 10YR4/1 暗灰色砂質シルト(炭化物密集(15%・微化鉄斑)



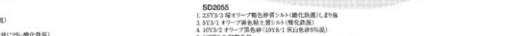
SD2051・SD2052・SK2050
1. 10YR4/1 暗灰色砂質シルト(5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト20%等状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂20%ブロック状に混入微化鉄水酸化に含)
2. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(5Y3/1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂20%ブロック状・7.5Y5/2 オリーブ色粘(15%ブロック状に混入微化鉄)
3. 2Y3/1 オリーブ黒色土質シルト(10GA4.1 明緑灰色砂質5%ブロック状に混入炭化物密集(2%・微化鉄斑)
4. 10GA5/1 明緑灰色砂(炭化物密集(2%・微化鉄斑)
5. 10YR4/1 暗灰色砂質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色砂20%ブロック状・10YR2/1 黒色粘土質シルト5%等状に混入炭化物ブロック状に10%混入)
6. 2.5Y5/3 淡黄色砂(2.5Y4/4 黄灰色砂10%等状に混入炭化物ブロック状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂10%程状に混)
7. 2.5Y5/3 淡黄色砂(2.5Y4/4 黄灰色砂40%マーブル状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂10%程状に混)
8. 2.5Y5/1 灰白色砂質シルト(10YR2/1 黒色砂質シルト5%ブロック状に混入炭化物(2%・微化鉄斑)
9. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(10YR3/1 黒褐色砂質シルト15%ブロック状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂30%等ブロック状に混入炭化物密集(2%・微化鉄斑)
10. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(5Y4/1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂10%ブロック状に混入炭化物密集(2%・微化鉄斑)
11. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色砂5%ブロック状・10GA5/1 暗緑灰色砂30%等ブロック状に混入炭化物密集(3%混)
12. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(5Y4/1 灰色細砂20%等状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂(ブロック状・10GA4.1 暗緑灰色細砂20%等・ブロック状に混入炭化物密集(3%混)
13. 10GA4/1 暗緑灰色細砂
14. 10YR4/1 暗灰色砂質シルト(5Y4/1 灰色砂質シルト40%ブロック状に混入炭化物等状(15%・微化鉄斑)
15. 2.5Y4/1 黄灰色(10YR3/1 黒色粘土質シルト10%等状に混入炭化物(2%・植物遺体等状に混)
16. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(炭化物密集(15%・微化鉄斑)
17. 10Y4/1 暗灰色砂質シルト(5Y4/1 灰色砂質シルト40%ブロック状に混入炭化物等状(15%・微化鉄斑)
18. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(炭化物ブロック状(2%・植物遺体等状に混)
19. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(10YR3/1 灰白色砂・2.5Y4/3等オリーブ色砂30%等状に混入炭化物ブロック状に3%混)
20. 10GA4/1 暗緑灰色細砂(炭化物等状に混)
21. 2.5Y5/4 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y2/2 黒色砂20%ブロック状に混入炭化物5%混)
22. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(炭化物ブロック状に5%混)



SD2052
1. 2.5Y3/3 淡黄色砂(2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト40%マーブル状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂10%粘状に混)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(10YR2/1 黒色砂質シルト5%ブロック状に混入炭化物粘状(2%・微化鉄斑)
3. 5Y2/1 オリーブ黒色粘土質シルト(微化鉄斑)
4. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト40%マーブル状に混入炭化物粘状(2%・微化鉄斑)
5. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色砂10%等状に混入炭化物密集(2%・植物遺体等状)

SD2051
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト(微化鉄斑5%混)
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト(2.5Y4/1 黄灰色砂50%混)
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト(2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト10%ブロック状に混)
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(炭化物ブロック状(2%・植物遺体等状に混)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色砂20%等状に混入炭化物粘状(2%・微化鉄斑)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y4/4 暗灰黄色砂20%等状に混入炭化物粘状(2%・微化鉄斑)
7. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(10YR2/1 黒色砂質シルト5%ブロック状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂ブロック状に混入炭化物・植物遺体等状に混)
8. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(10Y2/1 黒色砂質シルト5%ブロック状・2.5Y4/2 暗灰黄色砂ブロック状に混入炭化物密集(2%・微化鉄斑)

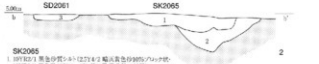
SD2055
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(撹乱混遺しより強
2. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト(微化鉄斑)
3. 10Y3/2 オリーブ黒色砂(10YR3/1 灰白色砂5%混)
5. 10YR3/3 暗褐色砂
7. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土(炭化物粘状(2%・微化鉄斑状に混)



第61図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SD2061・SD2062・SD2091・SD2120・SD2210・SD2289・SD2291・SD2294・SD2325・SD2379・SD2395・SD2411・SD2427・SD2428
SD2430・SD2436・SD2438・SD2444・SD2447・SD3261　SK2064・SK2065・SK2074・SK2480・SK2481

SD2061
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y4/2 灰黄色砂質ブロック混じり)
SD2062
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄橙色砂質マーブル状に混じり)
SK2064
3. 10YR2/1 黒色砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄橙色砂質マーブル状に混じり)



SK2065
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/2 暗灰黄色砂質ブロック状)
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/2 暗灰黄色砂質ブロック状)
SD2061
3. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/2 暗灰黄色砂質ブロック状)

SK2074
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y7/2 暗灰黄色砂質ブロック混じり)
SD2091
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y7/2 暗灰黄色砂質ブロック混じり)

SD2210
1. 10YR2/1 黒褐色砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色砂質ブロック混じり)

SD2120
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/2 暗灰黄色砂質ブロック混じり)

SD2291
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(焼化物混じり)

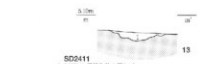
SD2294
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(炭化物ブロック混じり)
2. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト(10YR2/1 黒色砂質シルトブロック混じり)

SD2379
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(10YR2/1 暗褐色粘土ブロック混じり)

SD2325
1. 10YR3/2 灰黄褐色砂質シルト(鉱化物多量混じり)
SK2481
2. 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y5/1 灰色砂質ブロック状に混じり)
3. 2.5Y5/1 灰色砂(10YR2/1 黒褐色粘土質シルト)ブロック状に混じり)

SD2289
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(2.5Y6/1 褐灰色砂質シルト30%混じり)(10YR3/2 にぶい黄褐色25%混じり)炭、焼化物粒径1~15%・焼成粘土粒径1~5%混じる

SD2395
1. 2.5Y5/1 黒褐色砂質シルト
(炭化物粒径1~2%・焼成粘土粒径1~2%混じる)

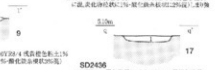


SD2411
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト
(2.5Y5/3 にぶい黄褐色25%粒状に混じり)

SD2427
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(10YR3/3 にぶい黄色
砂質シルト20%粒、鉱化物粒・炭粒5%混じる)

SD2428
1. 10YR2/1 黒褐色砂質シルト(10YR3/3 にぶい黄褐色
砂質シルト30%ブロック状に混じり(焼土粒含む)5%混じる)

SD2430
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(10YR3/1 炭(鉱化物粒状
に混じり焼成粘土1%・炭化物粒径1~2%混じる)、5%強



SD2436
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト(10YR3/1 黒褐色砂質
シルト20%ブロック状に混じり鉱化物5%混じる)

SD2438
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト(炭化物粒径1~2%・
焼化粘土粒径1~2%混じり)、鉄錆

SD2444
1. 10YR2/1 黒褐色砂質シルト(鉱化物5%)

SD2447
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(鉱化物5%)
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト(10YR3/1 黒褐色砂
質シルト20%混じり)

SD3261
1. 10YR2/1 黒褐色砂質シルト(焼化物混じり)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(10YR2/1 黒褐色砂質シルト5%ブロック状
に混じる)炭化物混じり

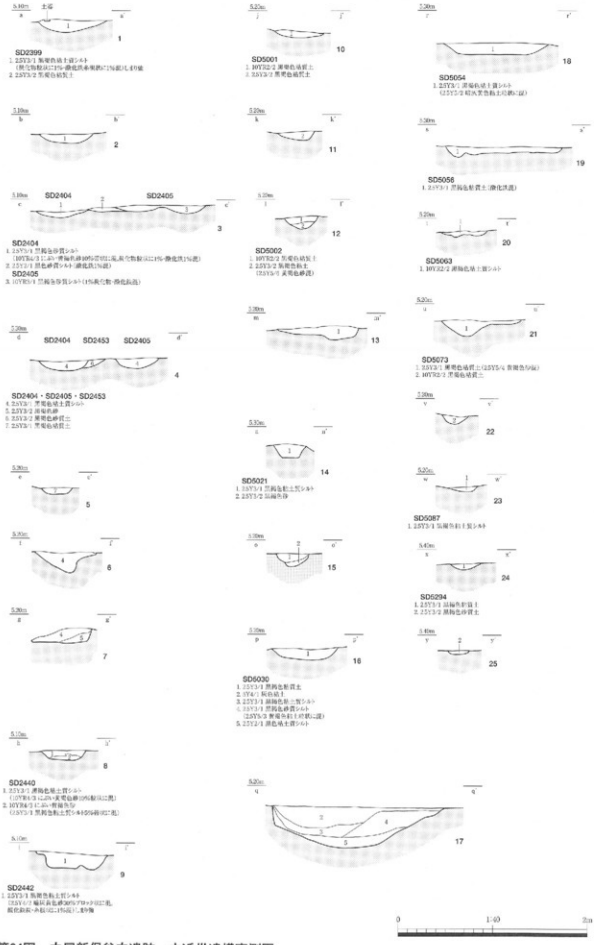
1:20 (1:1)　1m
1:40　2m

第62図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SD2061・SD2062・SK2064　2. SD2061・SK2065　3. SD2091・SK2074　4・5. SD2210　6. SD2120
7. SD2291　8. SD2294　9. SD2379　10. SD2325・SK2481　11. SD2289　12. SD2395　13. SD2411
14. SD2427　15. SD2428　16. SD2430　17. SD2436　18. SD2438　19. SD2444　20. SD2447　21. SD3261

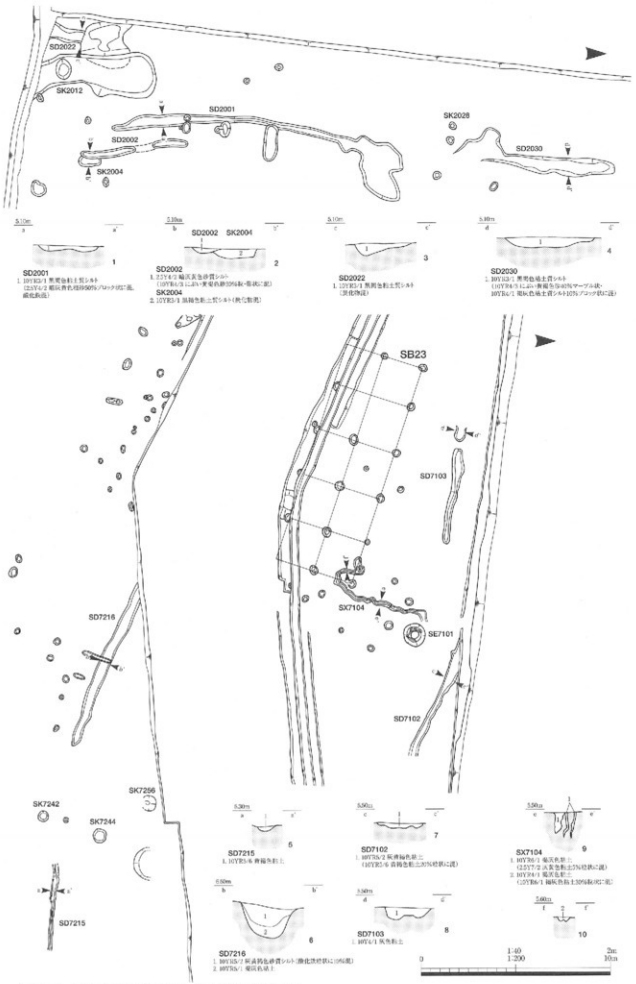
第63図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

SD2399・SD2404・SD2405・SD2440・SD2442・SD2453・SD5001・SD5002・SD5021・SD5030・SD5054
SD5056・SD5063・SD5073・SD5087・SD5294



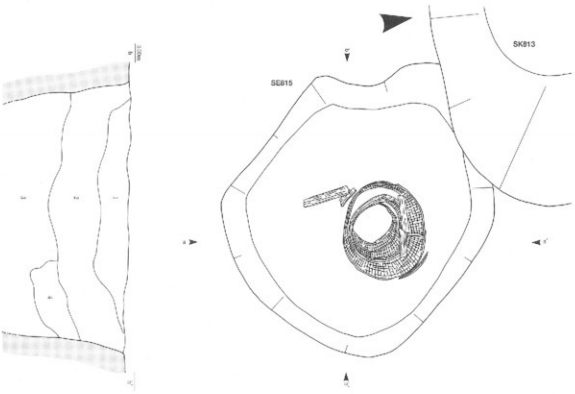
第64図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

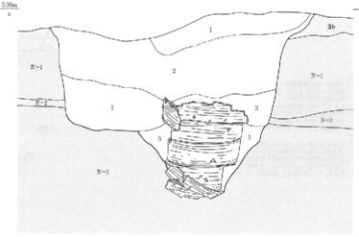
1・2. SD2399　3. SD2404・SD2405　4. SD2404・SD2405・SD2453　5. SD2453　6. SD2404　7. SD2405　8. SD2440　9. SD2442　10・11. SD5001　12・13. SD5002　14・15. SD5021　16・17. SD5030　18. SD5054　19. SD5056　20. SD5063　21・22. SD5073　23. SD5087　24・25. SD5294



第65図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SD2001　2. SD2002・SK2004　3. SD2022　4. SD2030　5. SD7215　6. SD7216　7. SD7102
8. SD7103　9・10. SX7104



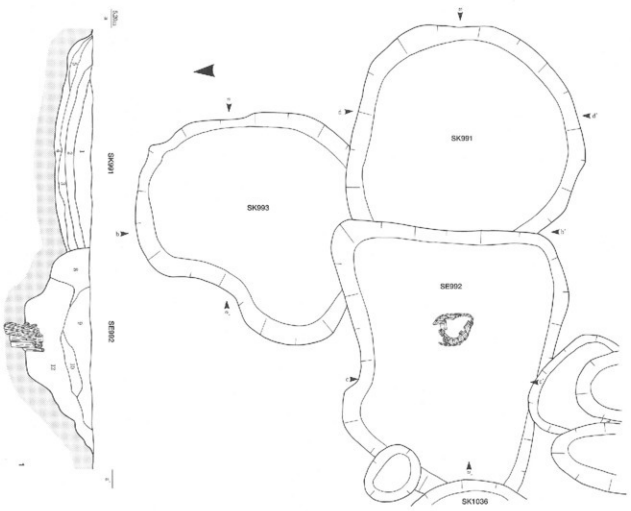


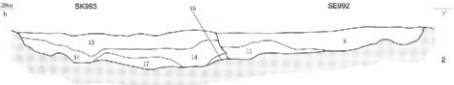
SE815
1. 10YR2/2 黒褐色シルト(炭化物混)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト(10YR5/3 にぶい黄褐色砂混)
3. 7.5YR3/1 黒褐色砂土質シルト(10YR7/2 にぶい黄褐色砂土ブロック状に混)
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂(7.5YR2/1 黒色砂土質)
5. 2.5YR3/1 黒色砂土

地山
Bb　7.5YR3/1 黒色砂(微化粒混)
N-1　5Y5/2 灰オリーブ色砂
N-2　2.5GY6/1 オリーブ灰色砂(部分遺体層切り込む)
N-3　2.5GY6/1 オリーブ灰色砂

0　1:20　1m

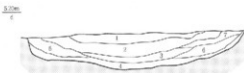
第66図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE815





SK991
1. 2.5Y3/3 黒褐色シルト(模化斑含)
2. N1.5/0 黒色地土(2.5Y5/3 黄褐色粘土ブロック斑に混、炭化物含)
3. 10Y3/1 黒色砂土(5Y5/3 黄オリーブ色粒土ブロック斑に混)
4. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト(模化斑含)
5. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR6/8 黄褐色砂質シルト粒、酸化鉄混)
6. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR6/8 黄褐色砂質シルト粒含む)
7. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR7/2 にぶい黄橙色地土ブロック斑に混)

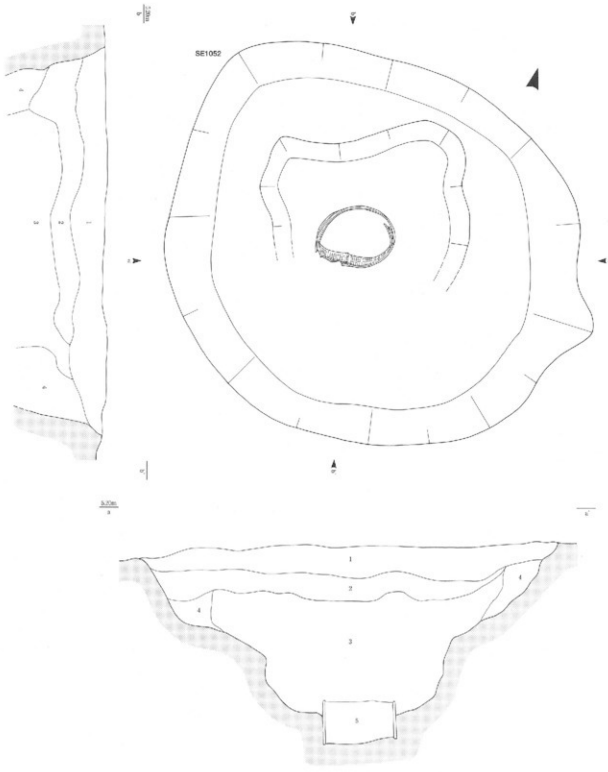
SE992
8. 7.5YR5/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y5/3 黄褐色砂質)
9. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト粒・ブロック状に混、酸化鉄混)
10. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト(2.5Y5/2 黒褐色地土ブロック含)
11. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト、酸化鉄混)
12. 10YR3/1 黒褐色シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色地土ブロック斑に混、炭化物混)



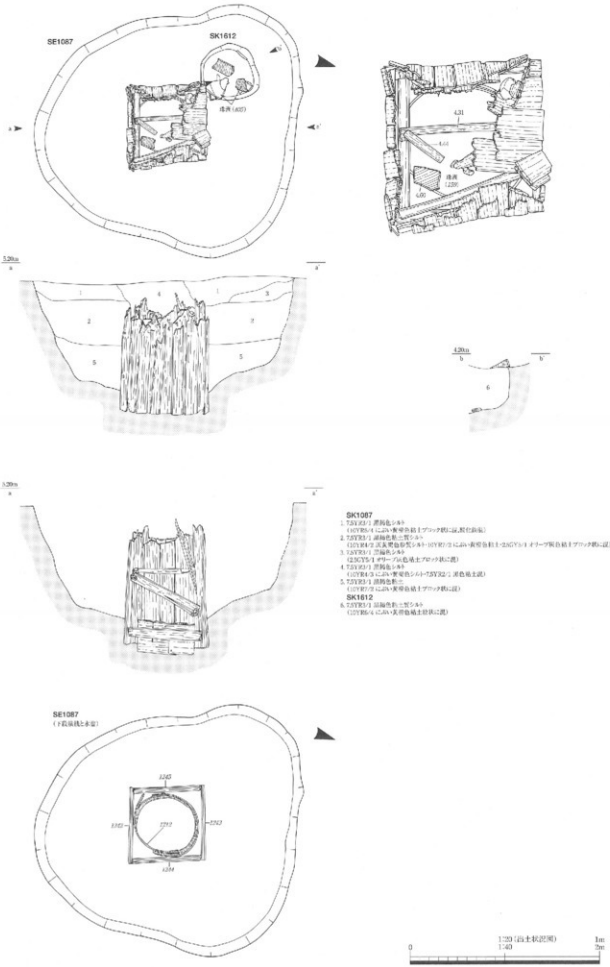
SK993
13. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(模化斑含)
14. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR4/3 炭黄褐色砂質シルト・10YR7/3・7/4 黄色粘土ブロック状に混、酸化鉄混)
15. 10YR3/1 黒褐色シルト(炭化物含)
16. 2.5Y2.5/1 黒色粘土
17. 7.5YR4/2 灰褐色土(5Y5/3 淡オリーブ色砂質)

第67図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SE992・SK991　2. SE992・SK993　3. SE992　4. SK991　5. SK993

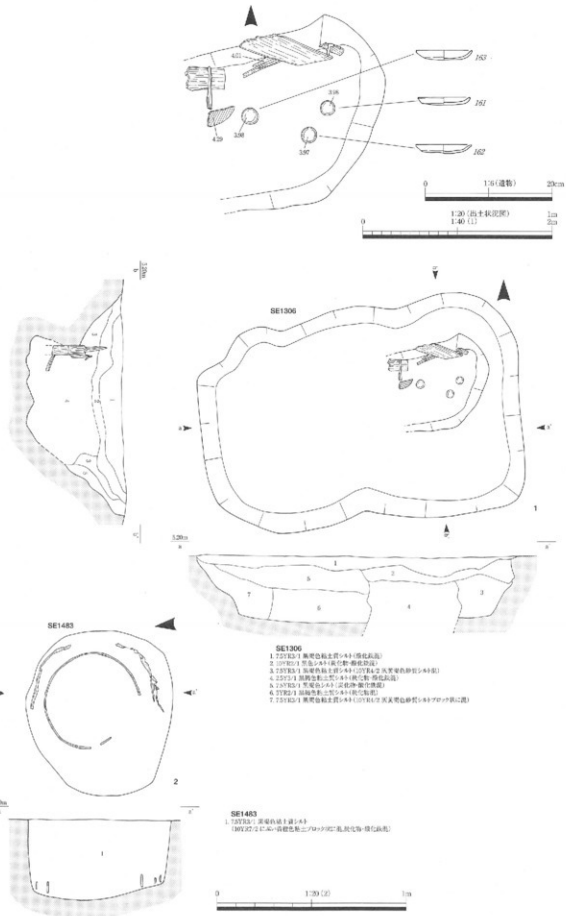


第68図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE1052

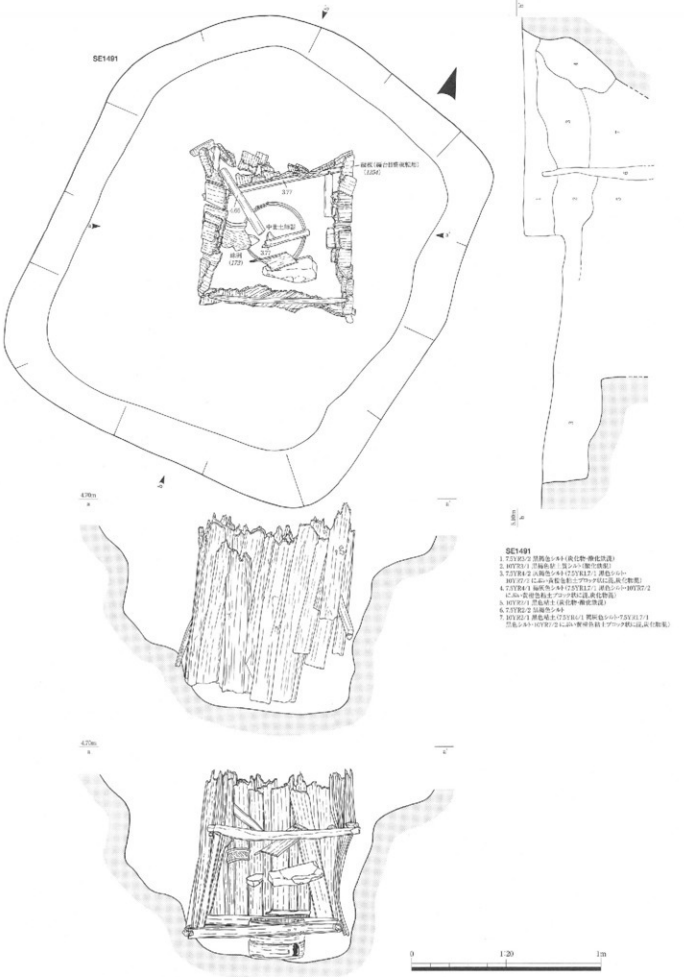


第69図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE1087・SK1612

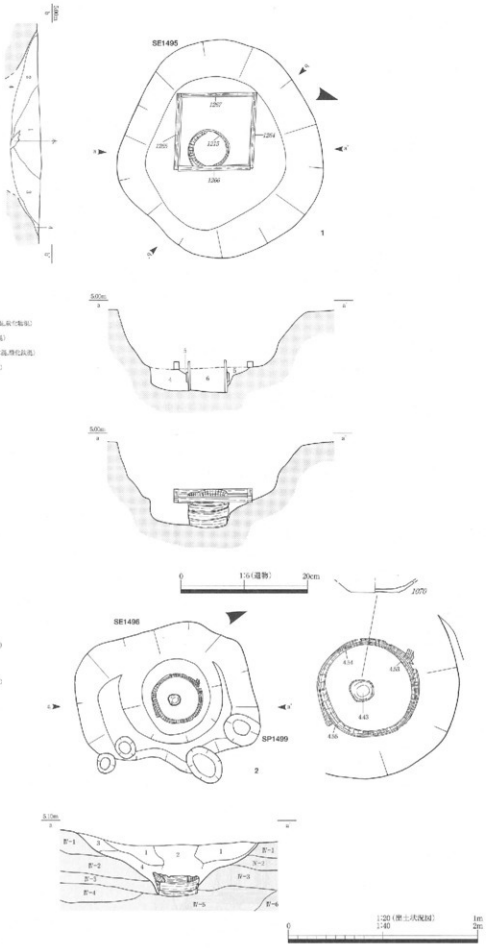
第70図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SE1284・SE1285　2. SE1260



第71図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SE1306　2. SE1483

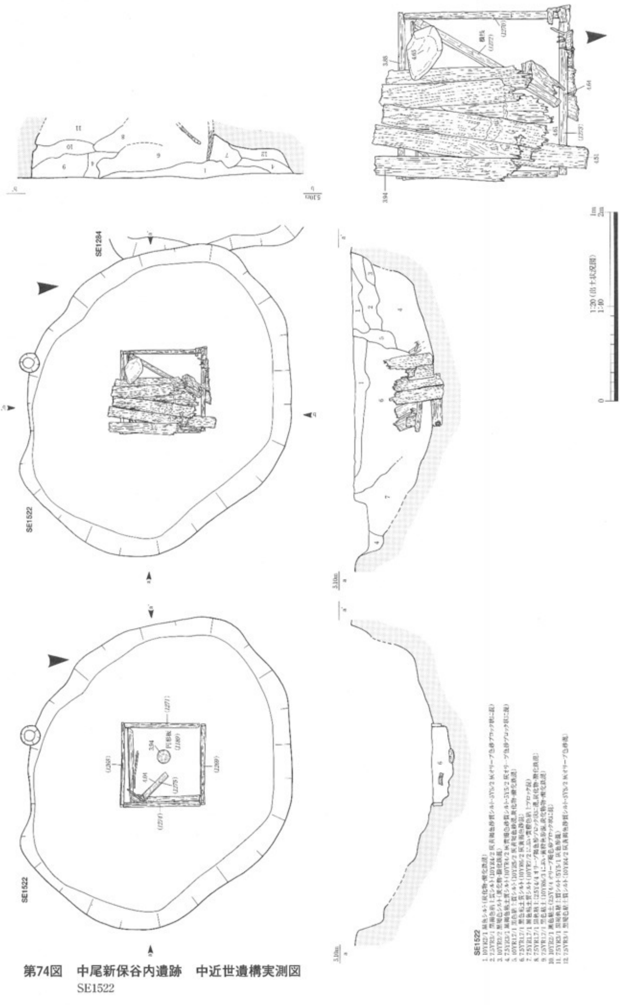


第72図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE1491

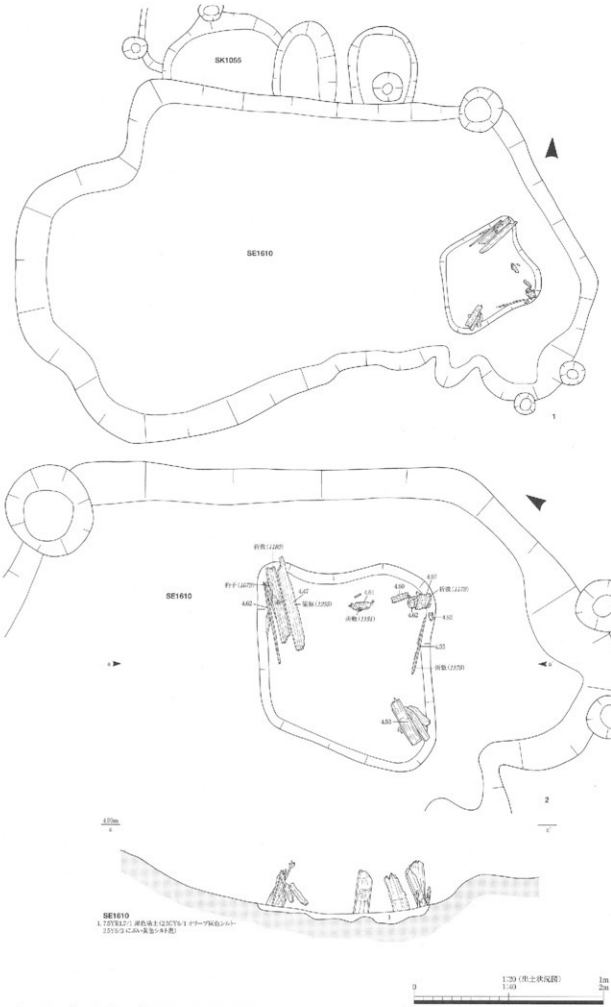


第73図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SE1495　2. SE1496

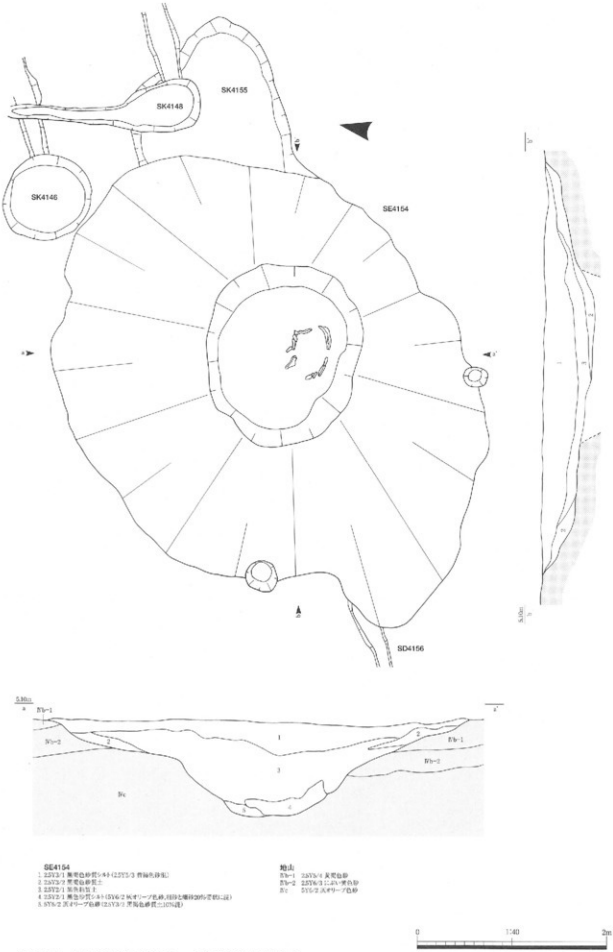


第74図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE1522

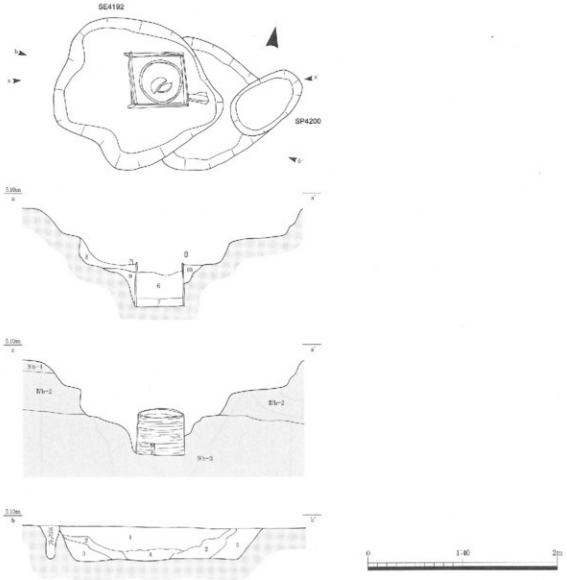


第75図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1・2. SE1610



第76図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE4154



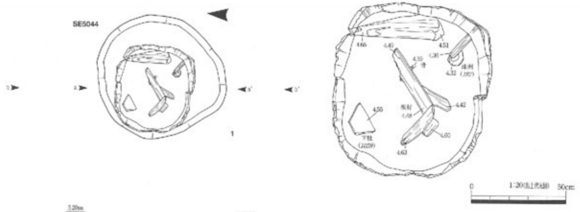
SE4192

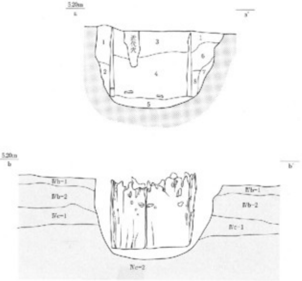
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土(2.5Y7/4 浅黄色粒土30%粒状に混)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂(2.5Y3/1 黒褐色砂質土-2.5Y7/4 浅黄色粒土30%粒状に混)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂(2.5Y3/1 黒褐色砂質土-2.5Y7/4 浅黄色粒土30%粒状に混)
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト
5. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 1.5%以下含
6. 5Y5/2 黒オリーブ色砂(2.5Y3/1 黒褐色砂質土10%粒状に混)
7. 5Y5/2 黒オリーブ色砂
8. 2.5Y5/2 黄褐色粒砂(2.5Y3/1 黒褐色砂質土30%粒)
9. 2.5Y5/4 黄褐色粒砂
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂(2.5Y3/1 黒褐色砂質土30%粒)

埋山

Nb-1 2.5Y5/4 黄褐色砂
Nb-2 2.5Y5/3 黄褐色砂
Nb-3 2.5Y5/6 黄褐褐色砂

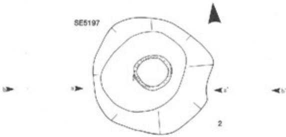
第77図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
SE4192

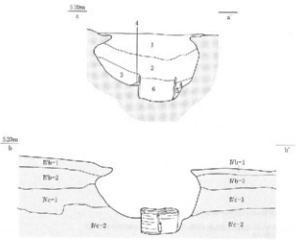




SE5041
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y4/3 オリーブ褐色砂・2.5Y5/4 黄褐色砂混)
2. 5Y5/1 灰色細砂(2.5Y4/1 黄灰色砂混)
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
4. 2.5Y2/1 黒色粘質土
5. 5Y4/1 灰色細砂(2.5Y2/1 黒色粘質土混)
6. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂(2.5Y2/1 黒色砂質シルト混)
8. 2.5Y2/1 黒色砂質シルト

地山
Ⅳb-1　2.5Y5/3 黄褐色砂
Ⅳb-2　2.5Y6/3 にぶい黄色砂(2.5Y5/4 黄褐色粗砂帯状に混)
Ⅳc-1　5Y5/1 灰色細砂(5Y6/1 灰色粗砂帯状に混)
Ⅳc-2　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂

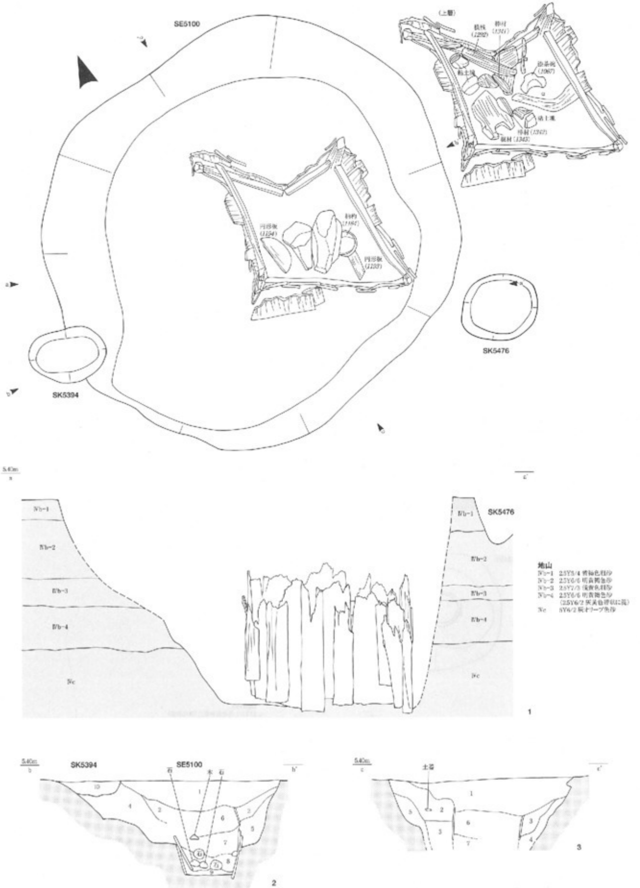




SE5197
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土(酸化鉄混)
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト　しまり弱
3. 2.5Y5/4 黄褐色粗砂
4. 2.5Y6/1 黄灰色細砂(2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト混)
5. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
6. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト(2.5Y5/2 暗灰黄色砂混)

地山
Ⅳb-1　2.5Y6/4 にぶい黄色砂
Ⅳb-2　2.5Y6/8 明黄褐色細砂
Ⅳc-1　5Y5/1 灰色細砂(2.5Y6/2 灰黄色細砂帯状に混)
Ⅳc-2　7.5Y4/1 灰色細砂

第78図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図
1. SE5044　2. SE5197



SE5100

1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色粘土粒・ブロック状に混,炭化物粒・焼土粒・ブロック状に混）
2. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（2.5Y2/1 黒色砂質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土粒・ブロック状に混,炭化物・焼土粒状に混）
3. 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト（2.5Y2/1 黒色砂混）
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂（2.5Y2/1 黒色粘土質シルト・2.5Y2/1 黒色砂ブロック状に混）
5. 10YR1.7/1 黒色砂質シルト（2.5Y3/2 黒褐色砂混）
6. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト（7.5YR4/3 褐色粘土質シルト粒・ブロックに混,炭化物・焼土粒状に混）
7. 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト（2.5Y2/1 黒色砂・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土粒・ブロック状に混）
8. 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂（2.5Y2/1 黒色砂質土混）

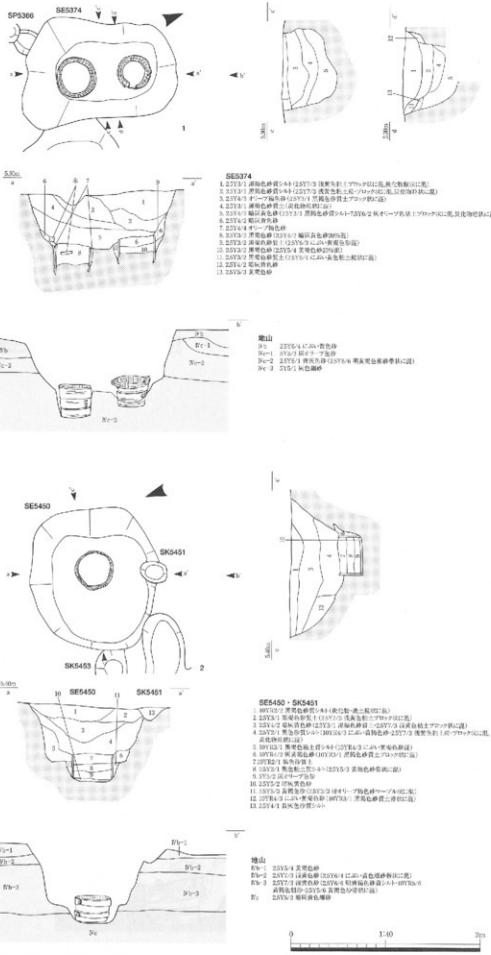
SK5394

10. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト（炭化物・焼土粒状に混）

0　1:20 (1)　1m
1:40 (2·3)　2m

第79図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SE5100・SK5476　2. SE5100・SK5394　3. SE5100



第80図　中尾新保谷内遺跡　中近世遺構実測図

1. SE5374　2. SE5450・SK5451